

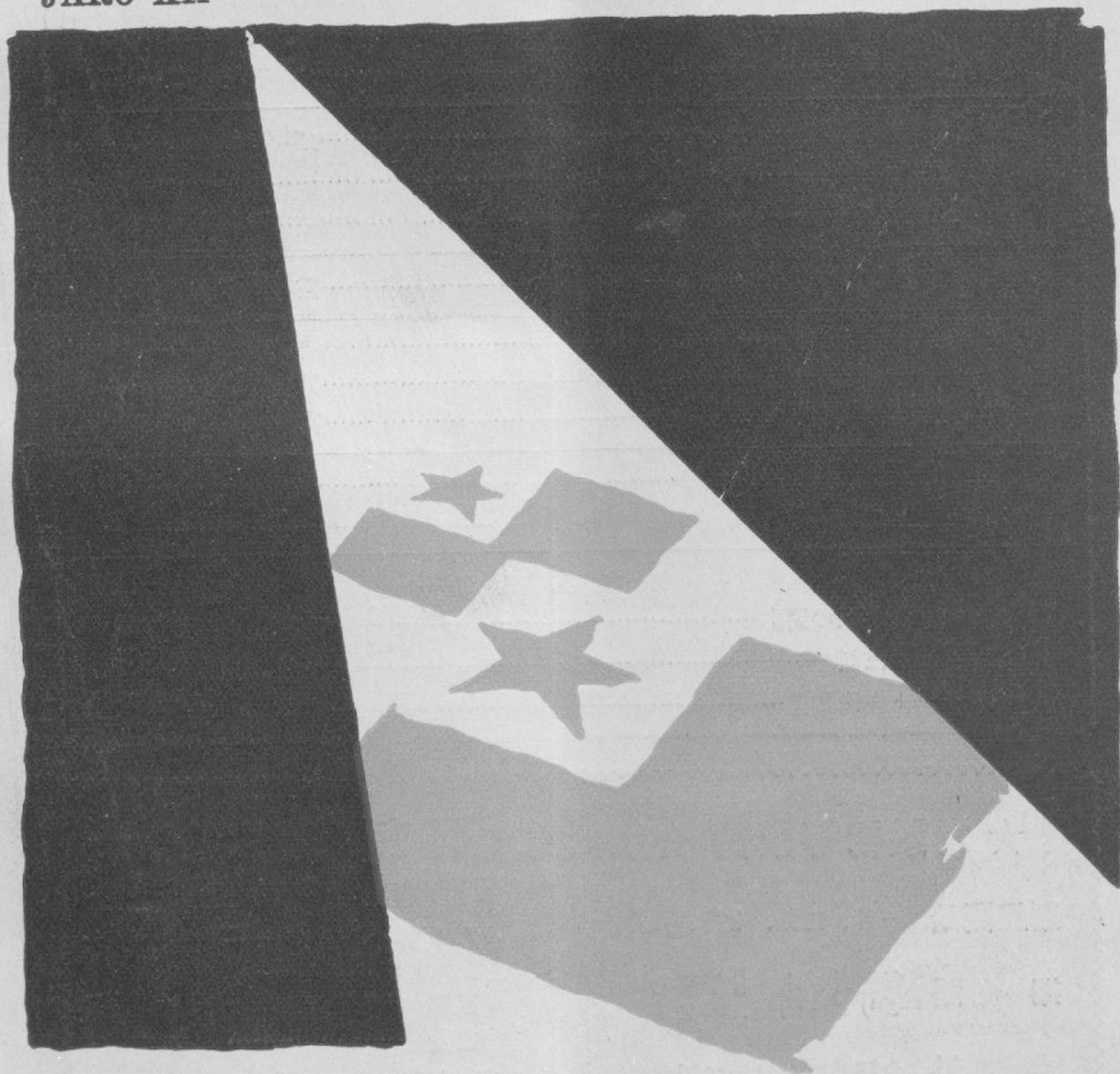
La Revuo Orienta

- 1931 -

JARO XII

OKTOBRO

N-RO 10



Japana Esperanto-Instituto

Ŝin'ogaŭa-maĉi, Uŝigome, Tokio, Japanujo.



目次	表紙 植野盛好
第十九回大會を祝福す.....	289
作文添削欄.....	大橋介二郎...290
質疑應答.....	小坂狷二...292
續他山の石.....	小坂狷二...294
吉野博士と黑板博士.....	栗飯原 晋...295
回顧二十有五年.....	296
新刊紹介.....	298
〔科學欄〕日本刀に就て.....	露木清彦...299
銀座街（原作）.....	安黒才一郎...302
ラヂオドラマ『霧の中』.....	露木清彦...303
深山の怪美人（翻譯）.....	南昌 世...305
海外報道.....	309
内地報道.....	311
—— 初 等 研 究 欄 ——	
やさしい讀物『茶の間』.....	小野田幸雄...317
註譯イソップ寓話.....	小坂狷二...318
エスペラント文法初歩.....	同 ...320

★ 常設初等講習 ★

新級開始 一月、四月、七月、九月

期 間 毎週月、木兩日午後七時
より二時間宛、二ヶ月

講習料 全期（二ヶ月）二圓

場 所 當學會に於て

★ 例會・研究會 ★

毎週水曜午後7時より

7時20分—9時..... 輪講

9時より..... 茶話會

用書 Fabeloj de Andersen II

會費..... 不要

出席者毎回二十名を越え、愉快的な會合です。輪講中文法語法の講義あり非常に爲めになります。多數會員の出席を歓迎す。

SUKCESON AL JUBILEA XIX

日本エスペラント運動二十五周年紀念

第十九回大會を祝福す

Dudek kvin jaroj—tio ĉe homo signifas, ke li atingis la plej belan aĝon de l' vivo, plenan de floranta juneco kun espero brila kaj spirito alta, pretan por energia batalado. La Esperantista movado en nia lando atingis ĵus tiun promesantan aĝon, kaj por festi tiun ĉi ĝojindan jubileon oni aranĝas en Kioto, antikva, historicfama urbo, la XIX Kongreson de Japanaj Esperantistoj, de la 16-a ĝis 18-a de la nuna monato.

Pasis dudek kvin jaroj, post kiam fondiĝis Japania Esperantista Asocio, kiun oni devis en la fino de 1919 pro financa kaŭzo anstataŭi per la nuna Japania Esperanto-Instituto. Ventego, ondoj, battoj, staro—ne esceptis la sorto ankaŭ la japanajn samideanojn dum tiu nemallonga tempo. Longe ni vagis sur „dorna la vojo“ minacis nin fantomoj en nigraj noktoj. Kun espero neelsirebla tamen ni ĉion ĉi tion eltenis, kaj nun ni festas la jubileon. Nin komencis favori la tempo, multon ĝi nun al ni promesas.

Rapidas do al vi el ĉiuj partoj da lando junaj kaj maljunaj, veteranoj kaj novuloj, ĉiu kun koro vibranta de ĝojo.

Sukcesu plene, kaj glora restu en nia historio por eterne via nomo, la XIX Kongreso de Japanaj Esperantistoj!

Pri la detaloj de la Kongreso vidu la sciigon en la Enlanda Kroniko, kaj tuj sendu vian aliĝon.

〔譯〕 二十有五年——それは人間なればその人が輝かしい希望と高い精神とを持し、氣力にみちた奮闘に勇み立つ人生の最も美しい年齢に達したことになるのである。我が國に於けるエスペラント運動も今や正に此の前途洋々たる年齢に達したのである、そして此の嬉しい二十五周年紀念を祝賀するために本年今月十六日より十八日迄古い都、歴史に誇れる都たる京都市に於て第十九回日本エスペラント大會が開催せられる。

日本エスペラント協會 (Japania Esperantista Asocio) が設立せられて茲に二十五年、尤も財政の原因の爲め大正八年の暮に協會に代りて我が日本エスペラント學會が承繼設立されたのであつたが、二十五年が過ぎた。狂風怒濤、打撃沈滞——此の短かからぬ年月の間運命は我が日本の同志達を除外しなかつた。永い事吾々は荊棘の道にふみ迷ひ、暗い夜の物の怪は吾等を威嚇するのであつた。だが吾々はよく忍び、よく耐えた、そして今や吾々は二十五周年を祝賀するのだ。時運は今や吾々にめぐり來つた、それは吾々に多くを約束してゐる。

依て此の國のあらゆる地方から、若いも老いたるも、先輩も新參も、急ぎはせ參するのだ、皆喜びにおののく心を抱いて。

遺憾なき成功を祈り、第十九回日本エスペラント大會が永久に我が普及史上に赫々の名を留めんことを希ふ。

大會に關する詳細は本號『内地報道欄』を御覽下さい、そして即刻參加を御申込み多數出席あらんことを望みます。

和 文 エ ス 譯 添 削

大 橋 介 二 郎

(1) 彼は彼の處へもソーダ水を一杯持つて来る様にボーイに命じた。

Li ordonis al la kelnero alporti ankaŭ al li glason da sodakvo.

約半数が成功して居る。al li の處を al si にした人が相當あつた。出題者の穴にはまつた譯だ。alporti al si glason ... は『自分の處へ一杯持つて来る』で主語は alporti する者即ち kelnero である。然らばボーイがボーイ自身の處へ持つて来る、と云ふ事になつて了ふ。si は其れが關係する動作の主語の再歸代名詞だから、この文の様に表面に主語の出で居ない場合には往々誤りを爲す事がある。此の文は *Li ordonis al la kelnero, ke li alportu al li glason.* を疊むものである。此の際 ke li alportu の li を書かない人が數名あつた。li は從屬文の主語で此處では抜かす事が出来ない。類例: *Ili invitis min vespermanĝi en siaj domoj* は *en iliaj domoj* が良い。何故なら manĝi するのは mi. domo は mi 自身のではない。Ŝi invitis min veturi en sia fiakro. は同様に en ŝia fiakro が良い。

(2) 太郎は次郎が次郎の妹を打つがまゝにした。

Taro lasis Ĵiron bati sian fratineton.

これも半数が良い。其他の人は sian を lian にしたのが多く、他は lasi を用ふる事が思ひ浮ばずに、*Ĵiro batis sian fratineton, sed Taro ne intermetis sin.* など云ふ御尤もなのもあつた。*Taro lasis al Ĵiro* と al を入れた人があつた。al が入ると太郎が次郎に對して或る事(物)を任せる様な意味を持つて来る。例: *Mi lasis al servisto la ŝlosilon de mia ĉambro.* 妹は pli juna fratino, malpli juna ~, malpli aĝa ~, 等も用ひられる。fratetino と云ふのが有つた。男性を女性にしてから eto を付けるのが順。

Taro lasis Ĵiron, kiu batas sian fratineton. は何うですか? 良い様でもあり何んだか鳥渡物足らぬ氣がする。それは、kiu 以下は Ĵiro の形容句で lasi に直接掛つて居ないから。

Taro lasis, ke Ĵiro batas ... と ke で關係を付けると lasi の内容が明瞭になつて来る。lasi は鳥渡面白い語で igi の様に使はれて居る例も D-ro. Z. にある。讀書の際に注意して抜き出しておくさよろしい。

(3) 天と地が一つになつて居る地平線のあたりでは、もう夕焼も消えて、沖合遠く、只一つのヨットが其の碇泊地へと急いで居る。

Ĉirkaŭ la horizonto, kie la ĉielo kaj la tero kuniĝas, jam estingiĝis la vespera ĉielruĝo kaj sur la maro malproksime for de la bordo jaĥto sola rapide sin ŝovas al sia ank-radejo. (富山市、石黒氏)

地平線を nivelo とした人がある。該語は水準、水平面で、富士山の頂上金明水の表面も一つの nivelo. 建築の土臺等を定める時に用ふる水盛器が nivelilo. 標高(海拔)一千米は mil metrojn alta super la marnivelo. 「天と地が一つになる」に tuŝi を用ひた人がある。良い思ひ付きだ。unuigi は餘り感心しない。天地を打つて一丸となし、其處に再び ĥaoso の状態を出現せしめる様な時には適當。ligiĝi — ligi は ion ligi per io で何にか或る道具なり無形の關係で、しつかり結び付けると云ふ意味合を持つて居るから此處では不適當。夕焼は單に vesperruĝo でもよろし。碇泊地は港に限つた譯ではないから haveno 又は kajo でなく ankradejo がよいと思ふ。一時的のものなら ankrejo でよろしい。

(4) 彼は重大の意義あるエスペランチスト間の旅行をなし、我等の言葉が、異なれる國及び國民の人達の間口の通信に非常に適切である事を世間に示した最初の人である。

Li la unua komencis la tre gravajn vojaĝojn inter-esperantistajn kaj

montris al la mondo la grandan taŭgecon de nia lingvo por busaj komunikiĝoj inter personoj de malsamaj landoj kaj nacioj. (Z)

此の題に用ひられる單語は割合に容易で正解者は多數であつた。唯文章が長いので文の構造上に誤りや拙ないのが多かつた。

「重大の意義ある」は、grave signifa, 或は signifoplena 等があつた。可。其の他 valora, meritinda 等も用ひられる。grava 丈で意義重大の意となる。通信=komunikiĝo は何人によらず相互間に事柄を通ずる意で交通の意にもなる。korespondi は主として文通。「異なる國及國民」malsamaj nacioj kaj nacianoj と云ふのがあつた。nacio は國民全體 naciano は個々の國民だから此處では意味をなさない。nacio は言葉や、經濟事情や風俗習慣等によつて結ばれた統一體。popolo は nacio より無統一なもので、民衆など云ふ場合には popolo である。此處では nacio でなければ、はつきりしない。Li la unua は li, estante la unua homo ... 次の様なのがあつた。Li estas la unua homo, farante gravan vojaĝon inter esperantistoj kaj li montris al la mondo ... これは homo と farante の間に kiu を入れて homo, kiu, farante ... と直し、kaj li を取つて esperantistoj の次の komo を置かれねばならぬ。Li estas la unua, kiu faris gravan vojaĝon inter esperantistoj kaj li montris al la mondo ... 此の文では kaj は上と下の二つの文章を單に接續して居る丈で、li estas la unua は下の文に迄掛つて來ない。下の文まで影響させるには kaj li montris の li を除かねばならぬ。

次に：Li estas la unua, kiu faris vojaĝon inter esp-istoj, kiu havas gravan signifon, kaj montris tion al la publiko, ke ... kiu havas gravan signifon かズツト讀むでゐると何々を云つて居るのか頭へピンと來ない。こちらの頭が悪いのかも知れないが、前に kiu faris があつて直ぐ又 kiu havas と來ると何んだか此の二つの kiu が同じ様な氣がする。kiu は便利な語だが、うまく用ひないで、さざれとさざれになつて、解りにくい時がある。gravan vojaĝon と何故簡單にしなかつたか。次に tio は勿論 ke 以下を受けて居るのだが、大體文章の始めに近い語には人の注意が惹かれるから kaj montris tion とやられると、「はて何

んだつたかしら」と思はせられる。tion は無くてもよし、置きなければ餘り邪魔でない處即ち kaj montris al la publiko tion, ke ... とした方がよい。

(5) 彼とは一八九七年二月十九日に死去せる、ポーランドの新聞記者にして詩人なる Josef Wasniewski である。

Li ja estas Josef Wasniewski, la pola ĵurnalisto kaj poeto, kiu mortis la 19-an de Februaro, en 1897.

en 1897 は en 1897-a 或は en la jaro 1897-a と讀む。en は書かなくてもよい。月の名は小文字で始めてもよい。ポーランドの記者は「ポーランド人の」の意であるから pola ĵurnalisto. Li, la ĵurnalisto de polujo, kiu samtempe estis poeto kaj mortis la 19-an de F., 1897, estas J. W. は紙面が不足で丁寧に要點を示す事が出来ないが、出来る丈原形を存して直して見ると、Li estas J. W., la pola ĵurnalisto, kiu samtempe estis poeto; li mortis la 19-an de F., 1897. 以上。

★應募者諸君へ。用紙は取扱上、官製端書又は合判罫紙（普通ノートの大きさ）に願ひたい。答案以外の學會への注文は別便に願ひます。きたない答案は見るのがいやになります。きれいに一行おきに書いて下さい。

十二月號課題 締切十月末日

(1) この頃日本は不景氣になつた爲め失業者等が澤山出る。

(2) 失業者の出るのは社會が悪いのだと皆が云ふ。

(3) 社會が悪くて失業者が出るなら失業者はみな好い人ばかりであらうか。

(4) 併し失業するものと、せぬ者さがある。會社を出されるものと残るものがある。

(5) 會社を出されるには何にか自分に悪いところがあるのではないだらうか。

(6) やはり智慧が足りないのではなからうか。

(7) 失業した人は、何にか自分に缺けてゐる處がなかつたかと反省す可きである。

(8) 個人の運命は社會ばかりで決まるものではない。

質 疑 應 答

小 坂 狷 二

★9月號本欄 *nenial* の説明中 Z 博士が此の語を使用されたること無き様御講述有之候も *Plena Vortaro* 同語の用例中 Z の記號を附し *deklinacioj tute estas bezonaj* と有之候。

(東京府下 T. S. 氏)

〔答〕 是は遺憾乍ら *Plena Vortaro* の誤です。本同用例は *Fundamenta Krestomatio*, 290 頁 12 行にあります:

Esperanto diras al vi, ke deklinacioj tute estas bezonaj neniaj.

即ち *neniaj* になつてゐるのです。『エスペラントを見れば語尾變化なるものは全く如何なるものも必要でない事がわかる』と云ふ意味で、恐らくは著者 Grosjean-Maupin が *slipo* を作る際書き誤つたものと思はれます。此の如く Zamenhof の用例を豊富に引用してゐる。例へば *solida* が『懇切な』の意味に使はれてる Z 博士の用例があるので試みに本辭典を引いてみたらちやんと出てゐるので感心した。序乍ら *solida* は、(1)『内實』(例へば液體に對して『固體の』、うつろに對して『内實な』など)より (2)『堅實』(即ち『丈夫な』)の意になり、更に (3)『實實』(即ち『せつせき、懇切な、まじめな』)の意になり得るわけである。

★『鼠は猫に食はれる(ものだ)』も『鼠は猫に食はれてゐる(最中)』も等しく *Rato estas mangata de kato* と書き表はすのですか。

(名古屋市 F. I. 氏)

〔答〕 然り。日本語では動詞現在に現行と現状の區別をする場合がある。『鼠は猫に食はられてゐる』は目下丁度そう云ふ事が行はれつゝある『現行』、『鼠は猫に食はれる』は今食はれてゐるのではなくとも鼠なる者がそう云ふ境遇に在る事、『現状』を示す。然るに歐洲語(イギリス語は除く)では一般にその區別がない。これは現行と現状とは全然話がちがふので、自然前後の關係や、口調で區別がつき、動詞の形式で之を區別する必要がないのである。ふさ見ると鼠がゐて、それが猫に食はれてゐるのを人に告げる時には、先づその人に鼠の存在を注意せぬことには話がわからぬ。即ち

Vi du, jen rato! La rato estas mangata de kato.

と云ふ様なことになる。然るに『鼠は猫に食はれる(ものなり)』と云ふ時には

Rato(j) estas mangata(j) de kato.

と云ひ得る。且つ實際と云ふものは空に考へることは趣が異なるものである。

此の機を利用して *Esp.* の動詞形式に就て根本の説明をして置く。歐洲語に現状、現行の區別のない事は發動の場合でも然り:

〔獨逸〕 *Ich spreche.*

〔佛語〕 *Je parle.*

〔露語〕 *Ja govorju.*

は之を日本語に譯するさ

(a) 私は話してゐる [現行]

(b) 私は話す [現状]

の二つの場合に區別なく用ひられ、又區別がなくとも此等の國語は立派に差支なく用ひられてゐる。それは前述の如く現行と現状とは話が『全然ちがふ』から自然と實地には間違はめつたに起らぬのである。ここに『今』(*nun; maintenant; teperj*) など云ふような時を示す副詞を入れれば明確に現行と現状と區別する事が出来、この如き場合には勿論動詞形式で兩者の區別をする必要は全然ない事となる。然し時の副詞を用ひず動詞形式のみで現行を特示することも出来る場合によつては『便利』であらう。歐洲語でも、イギリス語は *verboj de ago* に限つて日本語と同様に動詞形式に兩者の區別をする。

I am speaking. [現行]

I speak. [現状]

然し英語の困る事は前後の關係でわかつてゐる。即ち必要があつても無くても『常に』兩形式を使ひなければならぬことである。例へば『今』(*now*) と云ふ副詞があつても

I am now speaking.

と云はればならぬ事になつてゐる(尤も英語でも動作と同時に云ふ場合、例へば手品で『私は此の紙を取りあげます、それに火をつけます…』などは *I take this paper,...* など云ふことはあるが)。此の區別はイギリス人以外にとつては相當練習々熟を要することである。依て國際語たる *Esp.* としては一般には一般歐洲語と同様に現行現状の區別を設けず、『私は話してゐる(現行)』も

Mi parolas.

と云ふ。例へば甲が Esp. で話してゐるのを見て乙に之を教へる場合

Li parolas en Esperanto.

と云へば『今彼はエスペラントで話してゐるのだ』と現行の意なるは明かであるし、甲の居らぬ處で乙に對して甲の噂をして

Li parolas en Esperanto.

と云へば『彼はエスペラントを話す』と現状の意なるは明か。即ち話の場合が全然ちがふからめつたに誤解が起ることはない。更に前者は Li nun parolas en Esperanto とすればなほさら現行たることは明瞭になる。尤も Esp. には分詞形容詞を用ひて混成時（動作の起る前後關係を示す）なる形式があり、その中 estas+anta, 即ち

Li estas parolanta.

は英語の He is speaking なる現行形 (progressive form) に相當する。依て Li nun parolas なる時の副詞による外に此の現行混成時、即ち動詞の一形式でも現行を特示することも出来る。然し動詞形式による現行の特示は上述の如く元來『便利』のため『必要』ではない（イギリス語以外の歐洲語には全然ない位である）。依て普通には Li estas parolanta と云はず簡単な Li parolas を用ひる。そして必要の場合や言葉の變化を望む時にのみ Li estas parolanta を用ひる（實地に於て estis parolanta は用ひる必要が起るが、estas parolanta 即ち現在の現行はめつたに用ひられる場合がない）。又發動混成時を濫用すると非常に耳ざわりでいけない。英語をやつた人は發動混成時を兎角濫用したがる、これは大に注意してさけないとみつともない。二十年程以前米國の Yamans 氏歡迎會で某英語の大家が歡迎の辭を述べ Estante vojaĝinte tra multaj landoj, vi nun estas restanta en nia lando... とやられ、發音は美しかつたが混成時の濫發に聞いてゐて甚だ tikla に感じたことがある。

〔注意〕(1) 時の副詞 nun などがある場合には現在現行混成時を用ひてはいけないと思つてゐる人があるが、それは考へちがひで用ひる『必要』はないが用ひたそて一向『差支はない』: Li nun estas parolanta.

〔注意〕(2) 發動には單純時があるが、受動には單純時（即ち一つの語尾で受動を示す形）はない。これは歐洲語一般の習慣である。日本語のみは『食ふ』『食はれる』と語尾（尤も助辭入りではあるが）で示されるが歐洲語で

は英語でも『(助)動詞+受動分詞』の形式で示される。これは動詞の本體は發動であり、受動はその一變態と云ふ歴史的慣用から來たものと思ふ。依て Esp. でも發動を以て正態とし、之には -as, -is, -os の語尾を與へ、受動の方は動詞としての語尾形式を與へてない。即ち受動は發動の變態形たる發動混成時『esti+發動分詞形容詞』と同様に、變態形として『esti+受動分詞形容詞』で示される。依て受動の場合は常に『混成時』を用ひることになり、使用に當り常に適當な『時』の選擇をする必要がある。

〔注意〕(3) 受動は動詞としては變態形式であるので發動の如くには頻繁に用ひられない。就中 Esp. では受動形を嫌つて發動形を用ひる（その傾向は多くの國語にもある、日本語、ロシア語など然り）。そのために不定主格代名詞 oni がよく用ひられる。英語は之に反して受動形が可成り好んで用ひられる。これも英語と Esperanto の著しい相違點であるから注意を要する。是に就ては別に論ずることもあるう。

〔注意〕(4) 『混成時』は動詞の一變化と見做す人があるが Esperanto としては形式上普通の predikato 即ち『esti+形容詞』と考へるがよい。依て主語が複數ならば分詞形容詞も複數となるのが當然となる:

Multaj homoj estis mizeraj (homoj).

Multaj homoj estis mortigitaj (homoj).

此の二文を見れば文法上の形式に於て何等の差別がない。此の事實はくわしく論ずれば長くなり、且つ少しく高程度になること故他日にゆすることとする。

〔注意〕(5) 『現状』中には所謂『眞理、(即ち)不變的事實(の記述)』も含まれるのであるがこれはたいていの國語では特殊な形式はなく現在時で表はす。Esp. も然り:

En la mateno la suno leviĝas.

Hundo estas fidela besto.

Honestaj homoj estas amataj.

〔注意〕(6) 接尾字 -iĝi が受身に當る意味を表はすことがある。此の Esp. に特殊な用法は興味ある問題であるが餘白なきため是亦他日講述することにする。

La libro elĉerpigis=La libro estas elĉerpita. 該書は品切です。

Tiu ĉi libro tre bone vendiĝas=Tiu ĉi libro estas bone vendata. よく賣れる。

石の山の他續

二 狷 坂 小

52. 刀で犬を切った。

Li batis la hundon per glavo.

Tranĉi はナイフなどで切る, 刀で切るは刀で撃つ, 即ち bati, haki を用ひる。
首を切る: dehaki al iu la kapon.

53. 彼は誓を破った。

Li rompis sian ĵuron.

彼は約束を破った。

Li ne plenumis la promeson.

54. 吾々は彼が去つて行くのを見送つてゐた。

Per la rigardo ni ĉiuj sekvis lin forirantan.

又は Ni postrigardis lin forirantan.

因に『彼を停車場に見送りに行つた』は

Mi iris al la stacidomo por adiaŭi (aŭ saluti) lin.

などでよい; por forvidi lin は少しく直譯すぎる。

55. 彼女は彼に出遇ふといつても顔をそむける。

Kiam ŝi lin renkontas, ŝi ĉiam deturnas de li sian rigardon (aŭ vizagon).

(turni まわす (他動詞))

(turniĝi まわる (自動詞))

Turni は「くるくるまわす(回轉)」のでもよし、又は「ある角度だけまわす(ふりむける)」のでもよい。

La akvo turnas la radon.

水が水車をくるくるまわす。

Li turnis la paĝon.

ページをくつた。

Iu tuŝis min sur la ŝultro, kaj turnante min malantaŭen mi vidis, ke tie staris mia amiko.

誰か肩をさわるものがあるので後ろをふりむいて見るさ友が立つてゐた。

Timu Dion kaj deturnu vin de malbono.

神を恐れよ, 惡をさけよ。

56. 此の白金の葉巻容れは高價ではあろうが作りが氣に入らぬ。

Tiu ĉi platena cigarujo certe kostas multe, sed al mi ne plaĉas la prilaboro.

ellabori la objekton.

その品を作りあげる, 完成する。

prilabori la objekton.

その品を工作する, 作りあげる (製作する)。

prilabori la kampon.

畑を耕す。

perlabori sian vivon (aŭ vivrimedon).

働いて暮を立てる。

perlabori ĉiutagan panon.

日々の糧をかせぐ (働いてもうける)。

57. 此の悪口たれ奴。

Vi, senhonta blasfemisto!

Blasfemi は神をけがすこと。人に悪口を云ふ場合には Diablo! Pesto! などろくでもない名を口にする, 即ち『悪口する』は神をけがすことになるので blasfemi が悪口する意になる。

58. 此の不景氣に柔い蒲團の中に樂々と手足をのばしてねるなどは贅澤千萬だ。

Estas supermezura lukso en la nuna mizerega tempo (de financo), ke oni dorlotas siajn membrojn sur molaj kusenoj.

不景氣: malbona (aŭ mizera) tempo (de financo).

Membroj (全體を組み立てる一つ, 依て五體の一つ) 手足, (會などの) 會員, (家族の同族) 家人。

Matraco 寢臺の最下層に置く敷き蒲團 (ワラ蒲團やパネ入り蒲團); kuseno 四角な柔い蒲團 (matraco の上に敷いたりする。枕も小形な四角なもの故 kuseno, kapkuseno) 長椅子などの上に置くよりかゝり用のクッションなど。(lan-)kovrilo かけ蒲團 (主に毛布)。

吉野博士と黑板博士

粟飯原 晋

71. 吉野博士とステッド氏

法學博士吉野作造氏は1903年(明治36年)初め、東京帝國大學に在學中、その愛讀する英國の“Review of Reviews”誌に主筆ウキリアム・ステッド氏が紹介せる記事によつて、Esperantoを知り。その年の5月には當時海老名彈正氏を中心にして作つてゐた本郷教會(東京)の機關誌『新人』に『世界普通語エスペラント』と題し、ステッド氏の論文を翻譯紹介した。このEsperanto紹介文は日本に於ける最初のもの、一つであらう。吉野博士は『新人』への寄稿と同時に、“Review of Reviews”の廣告によつて當時發賣せられたO'Connor著“Esperanto, The Student's Complete Text-Book”といふ獨習書をロンドンに注文し、1903年11月10日に入手して、之が學習を始めたのであつたが、博士の言葉に従へば『眞面目にもやらなかつたし、又間もなく中止したから、物には勿論ならなかつた。物にならない點は今日も依然として舊の如くである』そうである。またこの頃、大學で小野塚教授(現在の東京帝大總長)よりブルデル氏が、Esperantoのこゝ等にも明るいと聞いていたが、別に教を乞ふ機會もなかつたといふことである。(吉野博士著『講學餘談』p. 181-193参照)このブルデル(Louis Bourdelle)氏はフランス人で、1900年より1913年まで法科大學フランス法律學教師たりし學者である。

因に日本エスペラント學會發行のJarlibro de J. E. I. 1926. 所載の『日本に於けるエスペラント普及運動略史』其の他に吉野博士が1901年(明治34年)仙臺の第二高等學校在學中、Esperantoを學べたと記載しあるが、同博士は『エスペラントを初めて知つたのは、大學在學中(明治33年9月-明治37年7月)で二高在學中といふ噂は全く訛傳』であると筆者に書を寄せられた。

72. 黑板博士とミスレル氏

1905年(明治38年)3月19日發行の『直言』第7號に、堺枯川(利彦)氏が黑板博士の談話に基づいて書いた『エスペラント語の話』とい

ふのが出てゐる。その最後に、『日本で此エスペラントの事に注意して居る者は東京大學の黑板勝美氏と、長崎に居る佛蘭西の宣教師某と、外に一二人しかないこの事』と書いてある。(吉野作造氏著『講學餘談』p. 192)

文學博士黑板勝美氏が嘗て雑誌『改造』(1922年8月)のエスペラント研究號に寄稿された『エスペラントに對する感想』に依れば博士がエスペラントに就て知られたのは、確か明治36年(1903, Jarlibro de J. E. I. 1926では明治35年)の頃で、當時長崎に居た天主教の外國教師某氏がフランスから宣傳を依頼されたといつて、同地の新聞に掲載した一欄の記事を讀んだのが最初であつた。博士は早速その新聞の主筆に一書を送り、その手を経てエスペラント語の書籍を得たのが、實にザメンホフ博士の初めて世に公にした『エクセルツァーロ』であつたといふことである。

黑板博士はその後1906年(明治39年)6月12日同志安孫子貞次郎、薄井秀一氏等と共に東京に『日本エスペラント協會』を設立し、1908年(明治41年)8月ドイツのドレスデンに開かれたる第四回萬國エスペラント大會には京大教授新村出博士と共に日本の同志として参加せられた。蓋し兩博士は日本人として萬國大會に出席せる最初の人々であらう。

長崎のフランス宣教師又は天主教の外國教師といふのはミスレル(Mistler)氏である。同氏は1893年(明治26年)にフランスより來朝せる教育家(フランスのリス師範學校出身)で、1905年(明治38年)まで、長崎の海星商業學校に在勤してゐたから、彼がエスペラントを傳へたのは此の頃の事であつたらう。ミスレル氏は天主公教の修道士として聖マリア會に屬し、1905年より1911年(明治38年-43年)までは東京に在て曉星中學校の教員たり1912年より再び長崎に於て海星中學校に在職してゐたが、數年前に亡くなつたと聞く。ミスレル氏が1903年頃Esperantoを日本に紹介してから、自らは此の國際語に如何なる關心を持つて居たであらうか。

回顧二十有五年

(Skizeto de la Esperantista Movado en Japanujo)

III.

第一期の二 興隆より没落へ

横須賀の日本エス協會 NES を併合して支部となし、東京の會を日本エス協會東京支部 Tokio Esperantista Societo とする事に決して中央集權の第一歩が進められた。東京支部は明治四十年(1907)一月十二日の例會に於て規約を定め黑板協會幹事長より高楠順次郎を支部會長に、淺田榮次、黑板勝美を副會長に安孫子貞次郎、大杉榮、千布利雄を幹事に指名、尙ほ Genève の第二回萬國大會提案のエスペラント領事館を設置し、安孫子を領事に、大杉、千布を副領事に任命。但し領事館と云つても有樂社内には日本エス協會や東京支部と共に假設されてゐたわけである。なほ領事は其後三重縣相可の間宮雄一も引受けた。

第三の支部は横濱支部 Jokohama E-ista Societo で、志村保一、久内清孝等の盡力により明治三十九年十一月二十四日住吉町青年會館に發會式を挙げ、久内、城戸、東京の飯田安孫子の演説あり、來聽二百名。翌年支部會長に志村を推し、速水眞曹(現信宗)が幹事として不斷の努力を致された。四十年三月京都市知恩院内に山本、三村常信等支部設立を計畫、四月十四日小角富小路セイショウ校に於て文學博士島文次郎司會の下に發會式を舉行、難波博士、湯淺京都圖書館長、協會黑板博士の演説あり、中央ホテルで晚餐會を催した。

其他奈良に於ては四十年一月八日日新社に於て赤井氏の研究會、同夏函館に於て木村自老の講習(22名)、同三月有樂社々員のための黑板博士の講習あり、岡山、和歌山縣田邊、大阪にも運動が具體化しつつあつた。

此の頃、就中明治三十九年下半年に於けるエスペラント熱は世界にも其比を見ぬ興隆振りで、同年九月外國語學校に於て淺田教授の催した講習には學生二百名出席、同校編輯の雑誌『語學』には大杉がエス欄を擔當した。二六新聞はエス欄(文法)を掲げ、讀賣、横濱貿易新聞、神戸新聞の書き立てるあり、猫も杓子もエスペラントを口にする有様で、商品にエスペラント乃至エスペランドの名をつけたりするものもあつた(例へば其頃流行つた

『家族合せ』など)。三十九年八月頃友人から『君はしきりに Esp. を宣傳するが東京ではそんなものはすたつて New Esperanto が流行してゐる』と云はれて胸をつかれたものだがそれは其頃學生間に流行つた言葉逆様に云つて話す流行言葉のことで安心した事がある位、日本全體が Esperanto-mania になつたやうな有様であつた。此の頃の會員中吾人の記憶に残つてゐる人々の名を録して置くも意義ある事と思ふ(既掲の氏名は除く): 大岩暢夫(海軍)、内田莊一(見習士官)、野原休一、值賀虎之助、三木惠教、福田國太郎、石川安次郎、井口丑二、水科吉郎、初鹿野潤二、馬場信輝、小川正資、虎渡乙松、森元藏、相阪信、和田清、武藤於菟、高島清、同學(現大井學)、馬場千里、大庭勝、津川進、柿内三郎、月本喜多治、金田正容、高橋邦太郎、辻利助、松田恒治郎、勿那諦二、原田眞矩(原田勇美翁子息)鳴海帆羊等。

然し然ら此の盛況も南柯一朝の夢でさめやすい日本國民性は遺憾なく發揮され、黄金時代來と思つたのも束の間、明治四十年に入つては既に衰運に向つた。其の先頭を切つたのは日本に於ける最初のエス會たる横須賀支部で、四十年(1907)一月二十六日重要會議の召集で汐留幼稚園に集つたのは會長退職海軍中佐高崎宗次郎、幹事長福本新吉、中黒彌惣治、小坂狷二の四名(創立者加藤は缺席)のみ、ほの暗い石油ランプの下に福本幹事長より支部解散、熱心な會員は東京本部(協會)の方へ入會引繼いで貰ふ事の提案あり、憤慨の至りだが止むを得ず了承。それは小雨そぼふる寒い夜であつた。同月二十八日解散の通知を發送。協會の方へ乗りかへ入會したのは小坂と高崎の二名のみであつた。其年三月小坂は一年の病氣靜養を了へ東京の陸軍中央幼年學校に歸校、五月卒業東京灣要塞砲兵聯隊へ配屬されて再び横須賀に來、其の間加藤節と回覽雑誌を作つたが加藤節も商船學校の工場實習を了へ練習船に乗ることとなり一號だけで中止。其年九月小坂は病氣の爲め陸軍を去つて横須賀で靜養することとなつたのでよき相手の中溝新一を介して有志の糾合を圖り、

九月二十二日十一名の會員を得、同二十五日コンニャク版の雑誌 *Jokoska Esperantisto* 第一年第一號發行、中溝上京の爲め三號より手記の回覽雑誌とし、翌年六月より第二卷として引續き發行。

他の地方ではなほ一年の餘喘を保ち得た。明治四十年は丁度エス發表二十周年に當るので東京支部は七月二十一日夜神田橋畔和強樂堂に於て黑板勝美司會の下に紀念講演會を催し安孫子、田川、千布、來賓坪井、三宅兩博士の講演あり、横濱支部は二十日太田町日盛樓に晚餐會を、京都支部は同夕帝大圖書館に會合。

十一月十六日午後協會は第二大會を和強樂堂に催す。黑板病氣の爲め高楠司會、協議、評議員改選、外務大臣林薫を名譽會長に推舉し、我孫子貞次郎、木村自老、淺田榮次、田川大吉郎等の演説、林外務大臣、日本貿易協會副會頭池田謙三、大谷嘉兵衛の祝詞があつた。然し大會は之を最後として大正五年迄九年間開く事が出来なくなつた。

更に大打撃であつたのは運動の中心原動力たる帝大敎助黑板博士が二ヶ年の豫定で歐米に出張を命ぜられ四十一年(1908)二月出發したことである。留守は名義上高楠博士が引受けたが、實際の仕事は萬端千布利雄が専門に當つた。然し會員も激減し會費も集まらぬので雑誌 *Japana Esperantisto* も九號まで休刊、その九號も翌年一月に出た。勿論會合や普及會等も催せなかつた。茲に於て千布は大計畫を立てた。それは日本に於ける運動に見切をつけ、*Japana Es-isto* を外國向の雑誌とし『既に開拓せられたる歐米諸國に賣る』こゝまで、『既に商品となる飾らざる可からず。既に營業なり、競争者あらば何處までも競争せん、營業者の慣用する手段亦之を用ひんのみ』とあつて岡山縣美袋の會員赤木久太郎より資金を借入れ、雑誌は表紙廣告共四六倍版二十四頁、有樂社等より寫眞版を貰つて多數挿入し、日本紹介を主としたエス文記事ののせ『營業的方法に依り收入の道を計る』こゝとなり、千布氏專任に之に當つた。然し四十二年(1909)には十二號まで(但し二三月號は合卷で年十一冊)發行されたが四十三(1910)年には二號しか發行出来ず、しかも一月號が三月頃出るさ云ふ有様に終つたのは止むを得ぬ。なほ理論家たる千布は營利事業が協會に累を及ぼしてはならぬと云ふので四十二年に『日本エスペラント社』を設立、雑誌は社の名で發行。即ち雑誌が全く發行出来なくなつて

も『日本エスペラント協會』の名はそれと無關係に嚴として存在する理窟となる。かく雑誌發行の營利事業經營が進められる一方精神事業たる普及方面は全く顧みる暇はなくなつた。然し四十一年(1908)四月より東京在住の支那革命黨員のため大杉榮が講習(週四回、出席20)を開き、尙ほ夏季講習も開かれる筈の處、錦輝館赤旗事件で大杉が檢擧せられ、千布が懇請せられて七月十六日から講習を擔當した。

此の頃の入會者には佐々城佑、安黒篤(安黒才一郎父君)、彦阪本輔がある。佐々城は米國より歸朝し日本に於けるエス運動が鐵道唱歌同様過去一時の流行であつたと聞かされたが幸 *Jap. Esp-isto* 誌の事を知つて喜んで入會。彦阪は四十二年(1909)六月 *Samideano Ciumonata* (四六倍版十六頁)なる外國雑誌を發行し、千布氏に主筆たらんことを乞ふて拒絶され、千布より協會に合同せんことを申込まれて拒絶し、『競争者』の觀を呈したが、印刷の美に反して内容は千布から『文章精麗ならず』文法の誤りだらけと評された位で、やがて謄寫版刷に退化し、終に廢刊してしまつた。四十二年には有力な會員飯田雄太郎(四月九日)、二葉亭長谷川辰之助(露都より歸途五月十日印度洋上)が死去。飯田は死の直前に獨力和エス辭典の編纂を了つた。フールスキヤツプ罌紙二百枚位で後半は病魔と闘ひ乍ら書いた跡が歴然として見られた。勿論出版さるゝに至らなかつた。

此の年外國の同志が始めて、しかも三人來朝。何分にも會合等一切催されなかつた時代さて協會事務千布等一二の人が遇ふ事が出来たのみである。第一は Vladivostok 商業學校生徒觀光團と共に來朝した Richard J. Elleder で外國語學校露語科學生が植物園で歡迎會をした時淺田教授が出遇つた。實に流暢なので教授は全くわからなかつたと云つて居られた位。父母と家庭で *Esp.* を年中話してゐた事の事。七月二日大庭勝も電車中で出遇ひ、四日に大庭方で千布と共に會見。次は伊太利人 L. Bracci で八月六日協會(有樂社)を訪問、社の安孫子が會見、十月に千布が會つた。八月十七日ポルトガル人 F. V. Frire 來訪、千布が會見。Elleder は後年長崎露國領事館に赴任數年滞在した。

此年五月十五日現在の會員は日本 236、外國人 21 名に減少。此の頃の入會者は甚だ僅少で栗屋眞(野原休一が敎頭たる長府豐浦中學出身兵學校生徒)、津川進等。

新 刊 紹 介

(BIBLIOGRAFIO)

★INTERNATIONALE SPRACHNORMUNG in der TECHNIK, besonders in der Elek. Technik, de Eugen Wüster; VDI Verlag, Berlin, 1931; 17.5×24 cm., [16]+432 p.; prezo tole bind. RM 20.

表題わ「工學用語の國際的規定（特に電氣工學に於ける）」とでも譯すべきか。ドイツ Akademie des Bauwesens が出版費の殆ど半分を持つたという立派な外装と鮮明な印刷。まず言葉わ圖や記號と同様に工學者にとつて重要な器具であるからこれの合理化の必要な事から説き起し、全書の三分の二わ世界に於ける各言語の解剖、用語より分類した各國工學界の規格統一の状態、工學に於ける記號、略號、術語等につき詳細に述べている。かくして最も完全に用語を國際的に規定するにわ國際語を使用する事であると結論し、それから記述わ國際語の問題に移り p. 277 より巻尾まで全書の三分の一わこれで満されている。一般エスペランティストの興味を引くのはこの部分であろう。工學に用いべき國際語としてラテン語、英語、エスペラントが論ぜられている。人造語についてわエスペラントの外 Volapük から Novial に至るまで各々について記述があり、工學にわエスペラントが適するという事になつてゐる。次に人造語のエスペラントと自然語の英語とが比較論ぜられ數字的にエスペラントが勝るという結論を得ている。かくしてエスペラントをまず工學の一部門電氣工學へ導入せよと云つて筆をおいている。巻尾に5ページにわたりドイツ語とエスペラント書きの總括が付してある。國際語ないしエスペラントに關する文献及び數字的記事の多いのわ一般エスペランティストに興味深いことだろう。p. 385 に「東アジアのエスペラント」という題目があり主として日本に於けるエスペラント運動の状態が載つてゐる。日本科學界に於ける記事もかなり詳しいが醫學界に關する記事が他に比較して少いのわ「工學」なる名にさらわれたためか。日本に關する記事にわ誤りわ殆ど無いようだが p. 375 の Ostjapan わ Westjapan, p. 388 の Masataka わ Murata の誤りだろう。言語學者及びエスペラシティストにも興味ある内容である。〔前田勤〕

★LEA-KANTARO; tria reviziita eldono, eld.

Laborista Esperanto-Asocio, Berlin 1931; 10.5×15 cm., p. 78; pr. RM 0.40.

Batalantoj, Historiaj kantoj, Malliberujaj kantoj, Liberpensulaj kantoj, Popolkantoj に分ち約六十の歌詞集む。

Bonega kolekto da kantoj; multaj jam sufiĉe popularaj inter japana junularo. Nur mal-multaj versaĵoj lametas en ritmo kaj pekas kontraŭ la gramatiko. Ekz. „Naskiĝis ni, por iĝu rev' realo, Por reĝu ...“ (p. 24, l. 17; pli bone; Naskiĝis ni, ke iĝu ..., ke reĝu ...“

[Ossaka]

★SENBEDAŬRE AMO RABAS, de Takeo Ariŝima, trad. Tojosato Tooguu; eld. Japana Esperanto-Instituto, Tokio, 1931; 13×19cm, p. 103; 上製一圓, 並製七十五錢 (送料四錢)

T. Ariŝima, unu el la reprezentantoj en moderna japana verkistaro, jam konata de multaj eksterlandaj legantoj pere de „la Deklaracio“, eld. de Hirt u. Sohn, iam esprimis al S-ro Tooguu, la tradukinto de la dirita verko, sian deziron, ke el lia verkaro „Senbedaŭre Amo Rabas“ estu antaŭ ĉio tradukita en Esperanton kaj ke li volus scii, kiajn opiniojn la mondo havus pri lia filozofia kredo pri la vivo, kiun li spegulas en la verko, kiel ĝi estas. La aŭtoro kune kun sia amatino sin mortigis en 1923, antaŭ ol la promesita traduko estis finita. Kian koncepton havis la japana literaturisto-filozofo sin mortiginta pro amo kaj vivo? Tion al vi rakontos tiu ĉi verko.

前 號 重 要 正 誤

頁	欄	行	誤	正
257	右	-16	赤松忠雄	赤松定雄
257	右	-11	速見信宗	速水信宗
253	左	5	kantraŭe	kontraŭe
266	右	-14	壹岐坂殿坂	壹岐殿坂
267	右	-18	里彌吉	里彌惣吉
269	左	-12	la nun (は次行	glora の前へ
286	左	-5	„Mi, pensas,	„Mi pensas,

第8號 p. 225 本文1及5行 neatentite (は neatendite の誤, p. 335 右, -12 福本留吉は 福本新吉の誤。

通俗科學欄

武士道刀劍鑑

日本刀に就て

露木清彦

第一章

刀劍の本質

en'korp'iĝo 化身

Jamato-raso = alia
nomo de Japana
popolo.Animo de Samurajo
武士の精神Samuraj'ismo 武士
道

manifestacio 表示

klingo 刀身

neglekt'ado... 怠慢
わ刀身に錆を生
じさせる起因さ
なる

leciono 鑑戒

ne nur... 汝の名
譽や自己安全な
禦る道具である
ばかりでなく

disciplin'ilo 嚴師

el'ing'it'a = el'tir'-
it'a 引抜かれる

rigora 嚴格な

influo 徳力

unika kombin'ajo
無比の結合rafin'eco k. fort'-
eco 琢磨ミ力virin'eco 女々しき
こと

averti 警む

el'montro 誇示

POPULARA SCIENCO

Ŝtala Biblio de Samurajismo

— PRI LA JAPANA GLAVO —

K. Cujuki.

I. Esenco de la Glavo.

La glavo estas ĝusta enkorpiĝo de Jamato-raso. Ĝi estas kelkfoje dirita kiel la „Animo de Samurajo,” sed oni ankaŭ povus nomi ĝin „Biblio de Samurajismo.” Kaj oni respektis ĝin, kiel la manifestacion de la kavalira honoro, alta karaktero kaj morala kuraĝo. La knaboj estis instruitaj per ĵuroj sur polura klingo antaŭ si, ke iliaj animoj devas esti liberaj de ajna formo de malpuriĝo, same kiel la brilanta surfaco de la klingo. Ili estis atentigitaj al la fakto, ke neglektado kaŭzas ruston sur la klingo, kaj la leciono estis samtempe altirita pri la neceseco de konstanta kaj senĉesa peno por subteni purecon de karaktero.

Duaflanke, oni posedis la glavon kiel la memorigon de la puno, kiu nepre sekvos malbonan agon. „Tiu ĉi akra pinto,” patro dirus, „estas ne nur la gardilo de via honoro kaj kontraŭ via persona danĝereco, sed ĝi ankaŭ servos kiel sankta disciplinilo por vin puni, kiam vi farus malbonan agon.”

Kiam la klingo estas elingita, en la brustoj de la idoj de Jamato, ĉiam ekboldas sento, kiu memorigas ilin, kvazaŭ ili sidas antaŭ rigora majstro de la plej altega karaktero kaj sankta influo. La glavon, per unu vorto, oni tenis en la plej ebla alta estimo, speciale tiu klaso de japanoj, kies edukado estis konstruata sur la Ŝtala Biblio de Samurajismo.

Plue, la glavo estas unika kombinaĵo de rafineco kaj forteo. Virinecon plej forte abomenis la sekvantoj de la Ŝtala Biblio, sed ili samtempe estas tre zorge avertitaj kontraŭ la tendenco de kruda kaj vulgara elmontro de de forto, korpa aŭ alia. La vera Samurajo ĉiam devas esti sinjoro, kaj la glavo servas al li rememorigi, ke li

povas esti forta kaj potenca sen krudeco kaj aroganteco en sia sinteno. La Samurajismo estas la nacia konscienco de la infanoj de Jamato, kaj la glavo estas la defendilo kaj la manifestacio de tiu ĉi sama konscienco.

La glavo estas originala invento de Japanoj. Oni neniom pruntis el alilande metodojn de perfektigo en la fabrikado de ĝia ŝtala klingo. Ĉe ĉiuj aliaj branĉoj de la artoj Japanujo pli aŭ malpli ricevis alilandan instruon. Tamen, ĉe la fabrikado de la glava klingo eĉ la plej bona kaj kritika serĉado de historiistoj ankoraŭ prezentas nenian ateston pri ĝia alilanda origino.

Glavoj ekzistas ĉie tra la mondo. Eĉ sovaĝuloj havas sian propran tipon de glavo. La Damaska klingo estas merite admirita kaj trezorigita per la amantoj de la glavoj. Oni kredas, ke Japana kaj Damaska klingoj estas la nuraj klingoj, kiuj atingis la plej altan perfektecon de la arto. Tamen, ili tute diferencas en sia karaktero. La Damaska ŝtalo estas farita en sama fortikeco, kaj ĝi multe superas la Japana en punkto de elasteco, dume la lasta estas kombinaĵo el du naturoj de ŝtalo. Alivorte, la Japana klingo kombinas en si mem harditan kaj mildan ŝtalojn: La rando kaj la korpo de la klingo havas diferencajn hardecojn, la unua estas sufiĉe hartita por doni al si necesan akrecon, dume la dua restas mola en hardeco kun elasteco por malebligi rompiĝon.

La kombinaĵo de mola kaj harda ŝtaloj en unu peco spitis la lertecon de ŝtalaj spertuloj de la okcidento, ĝis S-ro. Hervey inventis la procedon nun konatan per lia nomo, kiam li aplikis sian metodon al la fabrikado de armilaj platoj por batalŝipoj aŭ pafiltuboj. Oni nun bone scias, kiel sukcese montras la kombinaĵo en unu bloko el du hardecoj.

La sama rezulto, se ne per la sama procedo, kiel tiu de S-ro. Hervey, jam ekzistis interne de la spertoj de la glavoforgistoj en Japanujo, tiel frue kiel la komenco de la naŭa jarcento de la kristana epoko. La plavoj de tiuj tagoj estas ankoraŭ konservitaj en la Imperiaj kolektaĵoj kaj ankaŭ en la familioj de la malnovaj daimioj.

La Japanaj glavoforgistoj obtenis la suprediritan

kruda 粗野な
aroganta 傲慢な
sin'teno 態度(ふるまい)

konscienco 道念

originala 独自の

invento 發明

fabrik'ado 製造

pli aŭ malpli 多少

kritika serĉ'ado 具
眼の精査

atesto 證據

propra tipo 個有型

trezor'igi 寶とする

perfekt'eco 圓熟

fortik'eco 強度

elast'eco 彈力性

milda 柔軟な

hard'eco 硬度

harti 焔を入れる

mal'eb'igi 不可能
ならしむ

spiti 逆ふ, 悖る

inventi 發明する

apliki 應用する

paf'il'tubo 砲身

rezulto 結果

glavo'forĝ'ist'o 刀
鍛冶

jar'cento 世紀

Kristana epoko 7
リスト紀元(西
曆)

daimio = Japana
feŭdestro.

kovrante... 粘土を
以つて刀身の全
體を被覆するこ
そにより...

ond'linie 波線形に

ard'igi 灼熱させる

plunĝo 突込む事

cisterno 水槽

garantia... 保証し
得る, 充分な

rekta kontakto 直
接の接觸

difekto 缺點

eviti 避ける

procedo 處理

komunik'ado 交通

meti'ist'eco 手際

importi 輸入する

prunte'preni 借り
る, 抄取する

kroniko 年代記録

tradicio 傳説

anomalio 變則

trans'i'gi 傳授する

konfid'ato=intim'-
ulo 親い者, 信
任ある者

dis'sem'ata 傳播さ
れる

ambicia 野心ある

laŭro=honoro の
意

rezulton kovrante la tutan klingon per argilo. Ili tiam zorge forigas la argilon laŭlonge de la rando rekte aŭ ondlinie, komforme al la dezirita rezulto por esti produktita post fajrado. Tion fininte, ili ardigas la klingon kaj atinginte la deziritan varmecon, la tuta peco estas subite malvarmigita per plunĝo en akvan cisternon, kies temperaturon oni ĝenerale pensas, ke ĝi estas duon-varma. Tiele la rando, kiu estas maldika kaj nudigita, fariĝas plene hardita je garantia akreco. Dume la ĉefa parto mem estas protektita per la argilo kontraŭ rekta kontakto kun troa kvanto da karboj en la daŭro de fajrado. Jen la klingo atingas tute diferencon hardecon, kaj la rompiĝemon, kiu estas la plej grava difekto ĉe klingoj, oni tiel sukcese evitas.

Kiam ni komparas la japanan klingon produktitan sub tiu ĉi procedo kun tiuj de la landoj kiel Ĥinuĵo, Hinduĵo kaj Koreuĵo, kun kiuj Japanuĵo estis en komunikado antikve, ni vidas, ke la metiisteco estas tute diferenca. Kaj nenia postsigno sin trovas, ke tian inter-san procedon oni importis aŭ prunteprenis de alia lando.

Tial do, ni ĝuas konkludi, ke la procedo estas originala invento ĉe la koroj de kelkaj el Japana popolo. Sed neniu scias, kiu estas la inventinto, ĉar la historio tute silentas pri tiu ĉi temo.

Kiel ajn interesa kaj genia la procedo estas, tre strange estas, ke nenia kroniko, nek tradicio ekzistas por konservi la gloran nomon de tiu ĉi granda inventinto! La sola rimedo por respondi al tiu ĉi anomalio estas tio, ke la procedo estis komence zorge gardata kiel la granda sekreto, kaj ĝin oni transigis nur al la konfidatoj. Dum longa tempo, tamen, la sekreto estis ŝtelata kaj fariĝis vaste dissemata. Kaj kiam ambicia homo provis pretendi la inventon, la procedo devus esti tro ĝenerale konata, por doni al li la ŝancon de akirado de l' laŭro.

[Notoj] Samurajismo: — Speciala moralo de samurajo.

Samurajo: — Japana kavaliro en feŭda tempo.

Daimio: — Japana feŭdestro.

EL GINZA

【Originalo de S. Aglo】

— FINO —

„Ĉu?“

Mi ekmiris ĉe ŝia rakonto kaj samtempe min suspektis, ĉar ŝiaj vortoj neniom akordas kun liaj diraĵoj. Nun mi decidis plue konstati la veron ĉe la mastrino de l' kafejo.

„Dankon, plue mi volas vidi la mastrinon.“

„La mastrinon vi volas vidi?“

„Ja, mi dankos, vi ŝin petos ĉi tien.“

Baldaŭ la mastrino venis kun intima rideto. Post la mondumaj komplimentoj mi ekaltiris ŝin al mia temo.

„Ĉu ofte venas la barono?“

„Jes, li venis antaŭlastavespere.“

„Fm, fm.“

„Kaj, sinjoro, jen okazis gravaĵo, vi scias?“

„Kio, mastrin?“

„La knabineto de l' barono jam iris for de lia brusto, vi scias?“

„Ja, pri tio ĉi mi volas konstati la veron.“ Mi fariĝis serioza.

„Hodiaŭ li venis ĉe min kun indigna fizionomio. Laŭ lia diro, mi mem forsendis ŝin ekster lian atingon.“

„Ĉu vere, sinjoro?“

„Aŭskultu, mastrin'. Kaj mi alkuris ĉi tien por konstati la veron. Antaŭ minutoj, kiam mi demandis al tiu knabineto pri lia amatin', ŝi diris, ke tre eble ŝi nun vivas ĉe sia amanto. Tamen tio ĉi al mi ŝajnas esti ne kredinda. Kaj mi plue petis vin.“

„Vere? Pri tio ĉi mi bone konas.“

„Do sciigu al mi la veron, mi petas.“

„Antaŭ tri tagoj ŝi venis al mi kaj diris kun larmoj: —, Mi devas iri for de li. Li amas min per tuta koro, tamen li estas la heredonto de l' familio de Barono kaj mi simple estas kelnerino. Kvankam kun arda amo mi edziniĝos kun li, mi ne povos atendi harmonian vivon. Se mi ne estos, li povos esti feliĉa. Jes! mi devas iri for de li, for de li pro lia feliĉo.“ Kaj de post la sekvanta tago ŝi ne venas ĉi tien.“ Ĉe ŝiaj okuloj briletis larmoj de kompatato.

„Dankon, mastrino.“

„Kiel vi opinias?“

„Mi kompatas ŝin. Grandanima ŝi estas! Dio ŝin gardu por eterne!“

Mi daldaŭ adiaŭis la mastrinon kaj nun mi min enĵetis en la fluon de homa rivero en Ginza.

[Daŭrigata sur p. 308]

EN LA NEBULO

— RADIO-DRAMO —

de Jûzo Jamamoto

kun la permeso de P aŭtoro
tradukis K. Cujuki

Voĉo:—Jes, certe jes, ĉar vi lasis paroli mortinton.

Tria maato:—Kio?...ĉu vi ja diras, ke Curuoka ne vivas?

Voĉo:—Mi ankaŭ ne estas certa, ĉu li vivas aŭ ne. Sed, tiu, kiu estis nun parolanta kun vi, estas almenaŭ *via* Curuoka.

Tria maato:—For vian ŝercon! Nenio stranga troviĝis en lia agado. Certe li vivas. Li certe kaŝiĝas en la ŝipo, kvankam li perdiĝis de mia okulo, pro via interrompo.

Voĉo:—Memflatema homo vi estas. Se Curuoka estus vivanta, via koro ankaŭ estus trankvila, do pro tio, vi sencele deziras lasi lin vivanta?

Tria maato:—Ne, ne, mi neniel volas diri tiel.

Voĉo:—Ne elturnu vin. Vi tuta estas palpebla al mi. Efektive vi tenas vin tre strange. Ekstere vi konfesas, kvazaŭ vi mem kaŭzis la tutan malfeliĉon, dum interne vi klopodas senkulpiĝi per via tuta povo. Kial vi aranĝas tian farsaĵon? En tia okazo estus pli bone, ke vi nenion diru al la ŝipestro. Kondutu pli bravule!... se vi konfesus ĉion antaŭ la ŝipestro!

Tria maato:—Simpla vi estas. Ĉu vi pensas, ke homo estas ligno?

Voĉo:—Prefere estu tia, tiam estus por vi multe pli bone!

Tria maato:—Diablo vin prenu, vi venis por moki min?

Voĉo:—Mi faris al vi specialan viziton por liberigi vin, ĉar oni mokas vin.

Tria maato:—Mi ja preferas esti ensorĉita de la diablo, pli ol liberigita de vi.

Voĉo:—Vi jam estas ensorĉita de la diablo. Tial do, vi ĉiam estas sentrankvila.

ラヂオドラマ

霧の中

山本有三作

露木清彦譯

vi lasis paroli...

死人に口をきか
せるからには

Mi ankaŭ ne... し

かさわ俺も知ら
ない

For vian ŝercon 馬

鹿なことを云ふ
な

kvankam li... お前

が来たので見失
つてしまつたが

vi sen'cele... お前

わむやみに彼を
生かしておこう
としてゐる

ne el'turnu vin 辯

解なんかよせ

Vi tuta estas... お

れにかゝつちあ
見通した

ekstere 人前でわ

interne 内心

kondutu... もつさ

圖太く構へる

Prefere estu... そ

の方がましでわ
ないか

mi faris... お前が

愚弄されてゐる
ので救つてやら
うさわざわざや
つて来たのだ

mi ja... お前に救

つてもらふより
悪魔にさりつか
れた方がましだ

en'sorĉ'ita 魂を奪

われてゐる, 誑
かされてゐる

sen ia ... 挨拶な
んかよせ、さつ
ささ出て失せる
ŝlosilo 鍵
mi enŝlosis ... お
前の盲想に締り
をしたのだ
laŭte ridegas... 高
らかに笑ふ
mokeme あざける
様に
lanternoj ... 燈火
異常なし
sen'inter'rompe 絶
え間なく

— 附 記 —

翻譯が如何に困
難なものであるか
此處につくづく痛
感したことを申し
述べる。

全篇を通じ小坂
先生の御訂正を願
つたこと並びにセ
ルベント會の會員
諸氏のよく筆者の
仕事を補け鼓舞さ
せて下さつたこと
を深く感謝の意を
表したい。又原作
者山本氏の理解あ
る翻譯許可を筆者
をして一層仕事に
精進させたこと此
處に附して感謝す
る次第である。

Tria maato:—Ĝene! rapide eliru, vi diablo!

Voĉo:—Mi eliros, se tion vi volus. Do, bonan nokton!

Tria maato:—Sen ia saluto! for tuj!

Oni aŭdas eksonon de ŝlosilo turnata ekstere.

Tria maato:—He, kial do ŝlosi tie, nebezono!

Voĉo:—Mi enŝlosis vian ideaĉon.

Tria maato:—Kio....kion vi diras?

Voĉo:—(laŭte ridegas el la tuta gorgo).

Tria maato:—Malfermu, malfermu! Se ne, mi ne
pardonas! (furioze frapas pordon).

Voĉo:—(mokeme) Ha ha ha....

Subite aŭdiĝas eksonoro, kiu anoncas horon.

Observisto:—(tre mallaŭte) Lanternoj... estas... en ordo,
estro!

Ŝipestro:—B...o...n...e!

Oni aŭdas la respondon de ŝipestro malklare.

Senintertempe sonadas la sireno.

(1927, 7)

— (FINO) —

— Post la laboro —

*Fininte tradukadon ĉi tie mi turnas min esprimi mian
koran dankon al S-ro Ossaka, kiu afable korektis la tutan
manuskripton malgraŭ sia tre okupiteco. Kaj ankaŭ mi
dankas al la membroj de Serpento-Rondo, kiuj helpis kaj
instigadis min en la tradukado.*

*Samtempe mi tre ĝojas, ke la aŭtoro de l' verko kun bonkoro
afable permesis al mi traduki.*

*Tutan manuskripton traleginte mi tre hon'as, ke mia
esprimmaniero estis ofte ne tre bona, tamen mi kuraĝis
publikigi ĝin dank' al la admono de la amikoj.*

— 1931, 8, 31 —

Skribu al viaj amikoj ĉiam sur la **propagandaj leterpaperoj.**

通信文通には必ず常に**エスペラント便箋**を用ひよ。

緑星及緑色宣傳文句刷込み上紙便箋、正百枚、一冊20 錢、郵 4 錢

Viaj kovertoj ĉiam portadu sur si belegajn **sigelmarkojn.**

御手紙の封筒には常しい**エスペラント封緘紙**を貼つて。

美しい色刷意匠の封緘紙、八十枚入一袋20 錢、郵 2 錢

Viaj brustoj estu ĉiam **ornamitaj per verdaj steloj.**

緑の星は常に胸間に輝け。(なんぼ星がステロミ云つてもこればか

りは捨てられぬ).....甲種(安全ピン)、乙種(背廣用) 各送料共 30 錢

丙種(安全ピン)、丁種(背廣用) 各 50 錢、郵 4 錢

★五芒星形七寶製ネクタイピン.....送料共 30 錢

La Stranga Belulino en Montaro

de Joŝitaro Susuki

tradukita de Ŝ. Minami

(1)

La pasintan someron mi vojaĝis en Tōhokuprovinco, kie mi renkontis ekstreme strangan fakton.

“Ho, denove! sur la sama loko. Verŝajne mi perdis la vojon?”

En la mezo de montoj mi rimarkis pri mia erariro, kiam mi estis transironta la monton Oseki, rondirinte la piedon de la monto Iŭazo.

Tamen la suno ankoraŭ ne subeniris, do mi piediris gvidata de landkarto, sed mi ne povis trafi ĝustan vojon. Monto post monto, nenia dometo..., kaj mi ne renkontis eĉ hundeton. Ho ĉielo! Vere mi embarasiĝis, kiam la krepusko senbrue komencis premi min. Pro konfuziĝo mi pli rapide iris al la supozeble korekta direkto, sed vane! Kaj fine mallumiĝis.

“Ho ve! Mi povus teni min trankvile en tiu okazo, se mi havus kunvojaĝanton. Pro sensenca afektemo mi intencis solan vojaĝon, kaj jen ĉagreno!”

Mi estis tute konfuzita kaj malesperiĝis. Mi sidiĝis sur la radiko de apudvoja pinarbo kaj enpensiĝis.

“Jam nun mi devas bivaki! Nu venu kia ajn bestaĉo! Mi pafmortigos ĝin per la revolvero!”

Hazarde mi turnis la rigardon al dekstra flanko, jen mi trovis lampolumon tre malklaran kaj solece brilantan ŝajne ĉe la mezo de la monto. Vidante la lumon mi multe ĝojegis. Por mi estas multe pli agrable nokti en domo, se aĉa kaj simpla kie mi povas eviti pluvon aŭ prujnon, ol pasigi nokton subĉiele en tia profunda monto, kie rabobestoj atakus min. Kaj senpripense mi kuris rekte al la lumo. Multfoje mi faletis sur rokoj aŭ glitfalis sur deklivoj, sed tolerante doloron fine mi proksimiĝis al la celita lumo.

Mi rigardis tra la mallumo la lumon, kiu briletas tra malgrandaj fenestroj de l' domo. Momente mi kuraĝiĝis. Subite mi alkuris la domon kaj sindeteneme kviete frapis la pordon.

“Haloo! Mi petas!”

Tamen en la dometo regis peza silento kaj nenia brueto. “Haloo! Mi havas peton. Mi perdis la vojon, kaj estas ĉagrenita. Bonvolu min enlasi, kaj permesi min resti tiun ĉi nokton!”

Mi timis, ke homoj en la domo prenis min por rabisto aŭ monstro kaj ili intence restas silentaj.

Do mi ripetis la vortojn.

“Mi perdis la vojon kaj estas konfuzita. Bonvolu noktigi min, mi petas!”

Kaj aŭdiĝis brueto de iu moviĝanta en la domo, kie ĝis nun estis tute silente. “Jes!” Aŭdiĝis milda voĉo. Tio estis virina voĉo. Kion mi aŭdas? Baldaŭ la pordo malfermiĝis. Jen sin montris bela mezaĝa virino kun senordaj haroj, kredeble en la aĝo de 31 aŭ 32 jaroj. Ŝi staris antaŭ malluma lampo. Ŝi estis tiel belega, ke mi apenaŭ povis kredi, ke bela virino loĝas en tiel profunda montaro. Surprizite mi paŝis senkonscie du-tri paŝojn malantaŭen kaj fikse rigardis la virinon. Ŝajne pro tio la virino surpriziĝis de sia flanko kaj momenton ŝi staris muta.

Mi ektremis kaj fikse rigardis ŝin. Komence ŝiaj hararoj, pala vizaĝo senesprima kaj longa basko timigis min. “Ĉu vi perdis la vojon?”

Per milda voĉo la virino alparolis min la unua. Mi iom trankvil ĝis.

“Jes, ... bonvole min noktigu nur por unu nokto, mi petas.” Timeme mi petis ŝin. Eble ŝi vidis miam konfuzitan sincerecon en la petego, kaj ŝi ŝajne trankviliĝis.

“Do vi estas konfuzita?”

“Jes, sinjorino!” Sed la virino montris mienon konfuzitan ĉe mia peto kaj hezitis momenton.

“Mi certe vin ĝenus. Tamen mi tiel ellaciĝis, ke fari unu paŝon plue por mi estas neeble! Mi ja havas manĝaĵojn, kaj mi deziras nur kuŝiĝi.”

“Sinjoro, la domo ne taŭgas por vin noktigi.”

La virino montris pli konfuzitan mienon, sed mi elpetegis ĝin, por ke mi povu noktigi.

En la domo troviĝis nenia valora meblo, en la ĉambro kun tabula planko, kiu estas ses matojn vasta, estis sternita borderita mataĵo kaj ankaŭ estis terplanko 6 aŭ 8 kvadratajn metrojn vasta.

Mi profunde trankviliĝis kaj manĝis la kun mi prenitajn manĝaĵojn. Dankinte la virinon mi tuj kuŝiĝis kaj tuj endormiĝis pro subita malstreĉiĝo.

(2)

Subite mi vekigis. Mi ne sciis, kiom da horoj mi dormis. Ĉirkaŭe de la domo izolita en profunda montaro estas terure silente. Premanta monta atmosfero minacis min. Nur klare aŭdiĝas akva sono fluetanta en valetto malantaŭ la domo. Estas ja noktmezo, en kiu eĉ arboj kaj herboj endormiĝus. Kaj subite min ekatakis suspekto, kiun mi neniam sentis ĝis tiam pro laciĝo, kiam mi alvenis ĉi tien. Kial la virino loĝas sola en la izolita domo en tiel profunda montaro? Kredeble l ĝejo de banditoj?

Iel mi ekstremis pro timego.

“Ne! ne pensu pri tio, devas dormi senkonscie!”

Tiel min mem mi trankviligis kaj devige fermis la okulojn. Ju pli maldormema mi fariĝis, kaj mi rememoris unu post alia terurajn scenojn en romano groteska: “Démona maljunulino en Adaĉi-ga-hara,” “Démona virino en izolita domo,” ... Sensitive mi denove fermis la okulojn.

Jen okazis ĝuste tiam—

Subite mallumiĝis sur miaj palpebroj, kie ĝis nun mi sentis lumeton. Kaj samtempe aŭdiĝis brueto de ŝtelirantaj paŝoj. Miaj nervoj akriĝitaj, kiel pinta pinglo, reakciis en tiu momento. Mi malfermis duone la okulojn kaj rigardis tiun direkton, kie estas miaj piedoj. Ha! Du nigraj figuroj pendas en la aero. Mi ekkuntiriĝis, kvazaŭ oni ekverŝis sur min glacian akvon. Apenaŭ mi detenis min de krio kaj fikse rigardis la ombrojn.

Tio estis du vestaĵoj pendigitaj je najloj sur la plafono por kovri la lumon. Mi apenaŭ trankviliĝis.

“Kial ŝi kovris la lumon por mallumigi kontraŭ mi?” Tiu penso vekis ĉe mi scivolemon pri la virino. Tiel longe kiel la enigmo restas nesolvita, mi ne povas trankviliĝi. Momenton sensitive mi streĉis la orelojn por aŭdi la movojn de la virino. Jam mia tuta korpo kvazaŭ fariĝis oreloj kaj povas aŭdi aŭ diveni kian ajn delikatan sonon!

Kaj baldaŭ bruetis. Ŝajne la virino elprenis ion el sub io. Tuj mi spionis tra la pendigitaj vestoj la sidantan virinon.

“Nun eble ŝi elprenis ian ilon por min fini?”

Mi pretigis min por la fatalo, plie mi fiksis la rigardon al la virino. Nerimarkante min, ŝi kun la dorso turnita al mi alte tenis ion, verŝajne keston. Ŝi demetis la kovrilon, elprenis ion el la kesto kaj ĝin ĉirkaŭprenis ŝajne kun amemo.

Mi min sublevis kaj atente rigardis ŝin. Nun la virino alprenis la aĵon al sia vango. Kion mi vidas? Klininte min sur mia flanko mi rigardis sub la pendigitaj vestoj tion, kion ŝi ĉirkaŭprenas. Miaj okuloj fikse algluiĝis al tio, kion ŝi havas, kaj mia korpo rigidiĝis kvazaŭ frapita de fulmo en la momento, kiam mi eksciis, kion ŝi havas.

Skeleto! Certe skeleto! Mi, studento de medicino, tuj ekvidis, ke ĝi estas homa kranio. Plie kun raviteco tute ekster si la virino lekadas per ruĝa lango la kranion, de supre malsupren kaj de malsupre supren! Mi senbrue kuŝiĝis kaj mi tuta ekstremis!

Ŝajne ekaŭdinte bruon la virino rigardis malantaŭen al mi. Sed ŝi denove komencis leki la kranion, eble trankviligite pro mia ŝajniga dormado.

“Se mi nun agos malsaĝe, certa estos mia sorto, ke mi ankaŭ fariĝos tia ostaĵo!”

"Mi premis la revolveron en la pōso kaj pretiĝis pān la virinon, kiam ŝi atakos min.

Post momento tamen la virino zorge enmetis la kranion en la keston kaj ŝi kuŝiĝis, eĉ komencis ronketi en agrabla dormado.

Mi tre trompiĝis, kaj neniel jam povis endormiĝi. Mi streĉis pensojn solvi tiun enigmon, sed absolute vane. Baldaŭ komencis tagiĝi, malgraŭ ankoraŭ estis kelkaj minutoj post la tria.

Rapide mi ellitiĝis kaj min vestis.

"He, vi jam ellitiĝis!" Neatendita voĉo de la virino denove surprizis min.

"Jes, ĉar tagiĝis, mi volas ekiri."

La virino sin levis kaj deprenis la pendigitajn vestojn, kaj diris.

"Ĉu vi havis bonan dormon?"

"Jes!" Mi denove ekstremis de timo.

"Mi kuiros por vi manĝaĵojn, kvankam ili devus esti malbonaj."

"Ne zorgu pri tio, mi petas. "Rapide dankante ŝin, mi eliris eksteren. Al mi vere ŝajnis, ke ŝi postkuras min, do kun la plena rapideco mi paŝis kvazaŭ kurante.

Mi apenaŭ atingis vilaĝeton malsupre de la monto. Ĉar mi estis laca de la marŝado kaj manko de dormado en la lasta nokto, mi ripozis ĉe unu tedomo. Kaj mi rakontis al la maljunulo de la tedomo pri la travivaĵo en la la-ta nokto.

"Ha, ankaŭ vi vidis? Hm, tio do estas vera!"

"He?"

"Antaŭe homo, kiu perdis la vojon, ankaŭ vidis tiun virinon."

"Ha! Ĉu iu alia ankaŭ vidis? Kiu do estas la virino?" Mi rapide demandis kaj la maljunulo komencis rakonti malrapide.

Ŝia rakonto jen sekvas.

(Daŭrigota)

[Daŭrigita el p. 302]

Neon-signoj brilas ĉe la frontoj de Ginza-Stratoj. Radiofonoj ĉie muzikas. Efemera amo naskiĝas vespere kaj mortas nokte kiel ŝaŭmoj en bierglasoj. Ĝi rotadas kiel la ventomuelilo de Ginza-Kaikan.

„Amiko mia! Vi estas savita. Dio benos vin!“ Mi eksubkrietis. „Mi neniam plu vin venigos ĉi tien. Vi nur fosu vian sulkon!“

*

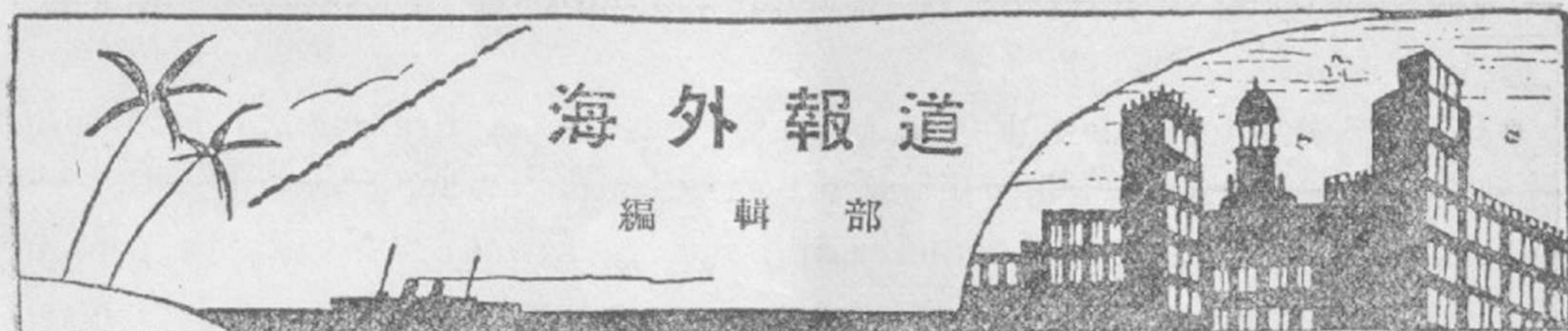
*

*

*

Subite vekhorloĝo ekkrakis. Mi ekvekiĝis. Ekter la fenestro la oraj sunradioj de Septembro 20-a sursŭtas sin agrable. Freŝa ekvento kantas la kanton de dimanĉo en la ĝardeno ĉe la verda arbustaro.

[FINO]



第 23 回 萬 國 エ ス 大 會

8 月 1 日 より 8 日 まで ポーランド の クラコフ で

大 會 開 會 式

壯麗な大會開會式と大會協議會わカトリック會館内で催された。

月桂樹に半圓形に取かこまれた高段にわ各國の政府や各團體の代表者が座り、その後方にわポーランドの表徴眞白き荒鷲が見え前方左手にザーメンホフ博士の肖像が飾られてある。前年 Oxford に於ける大會々頭 Long 氏わ立つて大會を宣し、名譽會頭にわ大學總長 Zaleski 教授、會頭に Odo Bujwid 教授、副會頭に日本川原氏をはじめ各國より十數名を選ぶ。

會頭 Odo Bujwid 教授わ來賓 ne-esperantistoj や esperantistoj に挨拶、此の大會開會式わマイクを通して全國に放送された爲 Bujwid 教授わエス語にポーランド語をはさんで宣傳にわけ目がない。ICK 委員長 Merchant 氏わ全エスペランティストの名に於て大會々頭 Bujwid 氏に氏がかつて la majstro に忠實な友でありしを引用して特別な挨拶の辭をのべ、先年 Oksfordo で自分の傍に座してゐた今わ物故した Prof. Cart や D-ro. Sós に哀悼の辭を述べた（一同起立）。

それより引續きポーランドの副太守 D-ro. Bilek, 大學總長 D-ro. Zaleski, 市長助役 Klimecki 等の挨拶、各國政府代表の挨拶、各能辯家わそれぞれ演説をなし Durrant 氏わエスペラントに關する國際聯盟英國支部の手紙を朗讀。出席せるザメンホフ家族に會頭の挨拶、オーケストラわ『タギーヂヨ』を演奏。Kreuz 氏わ各團體からの祝辭祝電を朗讀、續いて各國（20ヶ國）代表の挨拶あり、日本わ川原次吉郎氏挨拶す。

閉會時間に近づけば Bujwid 氏わ更にマイクを通してエスペラント大會の意義を説明し我々わどうしても祖國語と國際語エスペラントが必要であると述べた、オーケストラわ „Espero“ を奏し斯くして 23 回萬國大會の開會式わ 21 時幕を閉じた。

大 會 協 議 會

★第一回協議會 8 月 3 日（月）9 時 45 分 Marchant 氏議長にて開かる。ウクライナの同志わ開會式にてウクライナ國民の名に於て挨拶せんとしたのに之を拒絶されしを不平する。之に對し Kreuz, Bujwid 兩氏の意見あり、二三の挨拶のありて Marchant 氏わ ICK の意義を述べエスペラントわたさへ充分と云えなくともかなりの進歩を示してゐる、今日でわ經濟的狀態でわそれを消滅せしむることわ出来ない……。Kreuz 氏わ之に附加えてシエラーの旅行、ラジオ、各雜誌、國際關係諸團體や大會、學校、鐵道、郵便等を引用し説明する、Bujwid 氏わポーランドにてラジオや郵便切手等になされた盡力について演説、Schoof 氏わ各國團體の會費に關し報告し、Marchant 氏わポーランド共和國大統領に打電することを建議（一同賛成）。

Steiner 氏わウインに於けるエスペラント博物館の歴史と現況を報告し、目下文庫にわ約 5,500 の書籍があり 130 の諸雜誌が閲覧し得る。……。Jan Fethke 氏わ「映畫によるエスペラントの宣傳」と題して演説、我々わ大々的の宣傳を必要とする、映畫わ雜誌やラジオ等よりもはるかに勢力のあるものであるからエスペラントを映畫週報に導入する様留意せねばならぬ……。

★第二回協議會 8 月 5 日（水）9 時より。此の日の演説や討論にわ聞くべきものがある。

S-ro Georges Avril: — „Gazetara propagando, ĝia utilo kaj organizo.“

S-ro Šapiro: — „Gazetara propagando.“

S-ro Teo Jung: — „Centrigo de la gazetara informado pri Esperanto.“

S-ro J. Karsch: — „Vojoj kaj metodoj de apliko de Esperanto por turisma reklamo.“

★第三回協議會 8 月 7 日（金）に行われた。



7月31日ブレスラウ市に於ける大會前會

〔前列中央 BEA の會長 Robertson 氏、隣の婦人の後方白髪の老人は Akademio の副會長 Warden 氏、左より三人目鈴木正夫氏、四人目川原次吉郎氏、その後方わブレスラウの Komitatano で Frenl 氏〕

大會夏期大會

夏期大學總長 Prof. J. Loth, 副總長 D-ro. E. Privat, 及び Prof. Nowakowski, 等勿論公表された能辯家や有名な esperantistoj わ殆んど出席しなかつたが、ブラーグより D-ro. Pitlik や Scherer 氏が幻燈を用ひて講演することを承諾した。

斯うした事情の下に尊嚴なるべき夏期大學開講式は 8月3日午後 Jagelona 大學のコペルニクス講堂にて開會されたがだらけたものだった。

川原氏わ日本に於けるエス語運動を詳細に報道された。第二講として Scherer 氏わ幻燈を使用して日本及 Bali 島に關する講演を試み好評を博した。

その他大會の行事

★Diservoj 毎年大會開會に先立つて Diservo が行われる、Krakow に於ても新教徒の diservo (Hoppe 教師の説教) Ĉe 教師主司のカトリックのミサ (カトリック宗派に於けるエスベラントの使命について D-ro. Kukulta のエス語での説教)。

★Procesio 樂隊を先頭に緑星旗を手にする平和の騎士らの行列も亦見ものだ。

Krakovo 市わ Niecala 街を D-ro. Zamenhof 街と名命することに決定した。

★Konkurso Lasek Wolski に遠足をなし此處に雄辯大會が行われ、第一等 Font Giralt 教授、第二等 Tiberio Morariu 氏、第三等 Jan Jarecki 氏らが賞品を得た。

★Ekskurso Wieliczka え。

★Festivalo 各参加者みなその國の服裝をする假裝? 舞踏會、最も美しい服裝のものが「ミス」fraŭlino の稱號をもらえ、今回わ Fraŭlino Zofja Batycka が „Miss Polonia.“ (fino Polujo)。

★Fakunvenoj 特別分科會として UEA, Heroldo, Literatura Mondo 等あり、その他 TEKA (醫師)、ISA (科學者)、TAGE (教員)、ILEPTO (遞信員)、UDEV (婦人)、カトリック、バハイ、大本等の宗教分科會、盲人、學生、速記者、禁煙家、藥劑師等々の分科會。

★その他の會合 晝食えの種々招待、お茶の會、遠足展覽會等々。

★大會二次會 Varsovio と Bialistoko で。

大會閉會式

ヨーロッパ諸國の財界不況わ此の大會にも如實に現われて居り出席者わ約 700 人と算されてゐる。場所の關係にもよるが。

閉會式は 8月8日 10時すぎに開かれた。

S-ro Indra わ特にエスベラントを宣傳する日として、エスベラントが現れた日に大會を宣せよと提案(賛成)。ICK わ Prof. Christaller, Esp.-Instituto por la Respubliko Gremana 及ザーメンホフの家族に金メダルを贈ることに決した(之より先此のメダルは Sebert, Cart, Warden, Privat 氏等に贈られてゐる。)

Marchant, Bujwid, Kreuz, Šapiro, Schoofs 等の挨拶感想等に引續き Majstro の令弟 Filikso Zamenhof の熱ある演説ありて後大會々頭 Marchant 氏わ第 23 回萬國エス大會の閉會を宣した。

★.....LA...REVUO...ORIENTA...★...ENLANDA...KRONIKO.....★

—— 内 —— 地 —— 報 —— 道 ——

★...締切...毎月十五日.....編輯部...★

XIX Kongreso de Japanaj Esperantistoj

Kioto. 16—18. X. 1931

大 會 日 程

第一日：10月16日(金)

15.00 大會發會式

1. エスパーロ合唱
2. 開會の辭
3. 各地代表の挨拶
4. 祝電披露

16.00 第一回大會協議會

17.30 各エス團體總會

19.00 大會の夕

1. 親睦晚餐會
2. 餘興

第二日：10月17日(土、祭日)

9.00 分科會

13.00 學術講演

14.30 雄辯大會

16.00 第二回大會協議會

1. 各エス團體報告
2. 分科會報告

19.00 大會の夕

第三日：10月18日(日)

Pikniko. 9時：二條驛集合 9.30時：龜岡に向ふ、天恩郷見物、晝食後 12.30時保津川下りをして嵐山へ、散策の後日活撮影所見學、16.30時解散。

〔注意〕1) 大會々場：京都市植物園内昭和會館。京都驛前から烏丸線を経て「植物園」行に乗れば乗換なしで行けます。

2 合宿所；大會々場内、宿泊料は2泊(3食つき)3圓以内、尙詳細は Bulteno 第2號にて。

3) 大會參加費：金50錢當日會場にて。

4) 親睦晚餐會：金1.00圓。

5) Pikniko：保津川下りの出船契約の都合上參加希望者は大會第一日午後四時迄に申込みこと、(費1.50圓晝食、乗物代)以後の方わ2.00圓。

6) 大會協議會への提案は至急その趣旨を5名以上の支持者の署名と共に大會準備委員會へ提出のこと。

7) 地方會の代表者はその會の委任狀を携帯すること。

8) 分科會開催希望者は5名以上の支持者の署名と共に申込みこと。すでに決定の分科會は學生、佛教徒、鐵道關係者、盲人、大本等。

9) 雄辯大會：廣く一般の出演者を期待、出演希望者は至急準備委員會へ演題、要旨、住所氏名を明記して申込みこと。

10) 大會參加希望者わすぐはがきにて(1)住所氏名(2)合宿所滞泊日數(3)出席希望の分科會を名記して大會事務所へ。

11) 詳細は Kongresa Bulteno 第二號以下

にて報道。

大會事務所 京都市寺町夷川カニヤ書店内 第十九回日本エスぺラント大會準備委員會

鐵道賃割引證

第十九回日本エス大會參加者のため鐵道省は鐵道運賃二割引をしてくれます故入用の枚數を記し京都市寺町夷川『カニヤ書店』内、大會準備會宛至急割引證を御請求下さい。使用者が百名に満たぬと追徴金をとられますから學生割引證をお持ちの方も大會割引證の方を御利用下さい。期間中なら何時でも使へます、大に御利用を。

割引區間：内地各驛(鐵道省線と連帶で切符を賣る會社線航路も含む)より京都驛又は二條驛行きの往復に限る(但し急行料、寢臺料等は割引になりません)。第三日嵐山遠足の鐵道割引證は大會中にお渡しします故、大會中に委員から御受取り下さい。

割引期間：十月八日から同十八日までの間に切符を買ふこと。

通用期間：買った日から十月二十五日まで(大阪等京都近くの方で毎日京都へ往復される方は十月八日以後十八日迄は何度でも買つて使へ、復券は二十五日迄使へる。

注意：割引證は表面指定に従ひ必ず每葉住所氏名年齢を記入の上使用のこと。

鐵道エス會の提唱

〔京都〕 第十九回日本エス大會の期日も押迫つて來ました。我等の運動をして眞に活潑にする爲にわ何うしても統一された組織を必要とするのでありまして鐵道方面に於てもすでに古くから地方的にわ統一された團體がありました。全國に相當の同志を有し乍ら未だ全國的な統一わなく勿論連絡もなかつたのであります。

今回大會を機として全國的統一の計畫の第一歩として大會第二日に未だ一回も開かれなかつた鐵道分科會を開催することに決定いたしましたから全國の鐵道關係同志わ勤務に差支なき限り大會に参加され鐵道分科會に御出席あらんことを希望いたします。(長谷川)

東京側の意見わ？

今まで靜かに自らの畔を耕しつゝあつた我が鐵道エス會わ内部の充實を豫期して R. O. 誌八月にその存在を表明し併せて事業計畫の一端として鐵道部内に於けるエス運動の爲に全國的の連絡を計るべしとの意見を發表した。が聯盟創立に就てわ東京鐵道エス會としてわ具體的な考を持つてゐなかつた。會員會議をした處、エス運動に於てわ總べて實力以上の進行を嚴に警しむべきであるから、當初わ只單に各同志相互の聯絡を計る程度の事業をなす組織を創り、漸次その後の進歩に伴つて發展さすべきであるを云うことに意見が一致し、聯盟の中心わ東京で引受けることになつてゐる。

この方針に基く聯盟結成具體案わ來るべき鐵道分科會に提出されることになつてゐるが東京以北の各鐵道エス會大體の意見わ賛意を表して居り聯盟の力強い活動を期待してゐることであるから此の結成わ非常に意義あるものと考えられてゐる。(青木)

日本佛教エスペ란チスト聯盟創立大會

去る五月京都に於て産聲を擧げた吾等の聯盟は第十九回日本エスペ란チスト大會を機會として聯盟の創立大會を開催する。Budaanoj-Esperantistoj は勿論、佛教エスペ란チスト運動

に共鳴するの士は吾等の kunlaborantoj だれ。

場所 京都市圓山公園(音樂堂前)
佛教兒童博物館

日時 十月十五日(木曜)
午後一時(日本エス大會の前日)

〔注意〕 日本佛教エス聯盟、並に創立大會に關しては次へ紹介せられたし。
京都市六條通高倉角 高倉會館内
日本佛教エスペ란チスト聯盟

財團法人日本エス學會總會

日本エスペ란チスト大會例年の慣例により第一日(十月十六日)大會發會發會式終了後引續き當財團法人總會を開きます。大會參列の會員は必ず御出席を乞ふ(17時30分より同50分までの豫定)。

大會行 Karavano

東京、横濱 → 京都

第十九回日本エス大會參加のため東京地方よりの Karavano を組織します。

出發： 10月15日午後11時10分東京驛

到着： 10月16日午前11時22分京都驛

〔注意〕 汽車賃4圓59錢(二割引急行券不要)各自支拂のこと、割引證わ豫め御請求のこと 學會にもあります。集合：15日午後10時半までに東京驛乗車口中央。

×參加希望者わ學會まで第一報下さい。

大會參加費用概算

大會參加費	0.50圓
親睦會費	1.00 "
宿泊(二泊三食つき)	3.00 "
遠足費(晝食代共)	1.50 "
京都までの旅費	x
	x+6.00圓

放送局のエス功獻

★J-O-D-K(京城) 7月28日18.5時「エスペ란チスト界の現状」大山時雄氏

★J-O-N-K(長野) 9月16日19.5時「國際補助語エスペ란チスト」古澤末治郎氏

★J-F-A-K(臺北) 9月18日19時「國際語エスペ란チストに就いて」



講習會たより

〔京都〕 第一會場滋野小學校＝西川豐藏氏指導 25 名 8 月 22 日終了、用書「初等讀本」。

★第二會場富有小學校（第三會場生祥校と合同）＝藤田氏指導 15 名用書「講習讀本」。

★第四會場上鳥羽小學校＝西村氏擔當 15 名。

★第五會場昭和青年會＝高橋氏指導 7 名。

常設エスペラント講習會 昭和青年會でわ毎月 13 日より 10 日間毎日 19 時半より 2 時間。

〔朝鮮〕 ★京城三清洞監理教會エス語部にて 7 月 8 日から 10 日間毎日 19 時半より柳基興氏指導にて 20 名受講、中 3 名女子。

★京城朝鮮エス學會＝第 35 回講習會 8 月 4 日－18 日大山時雄氏指導。

★水原エス會＝第二回特別研究會を東修氏を指導者として 8 月 3 日より 2 週間、27 名。

〔福岡〕 田川郡日本メソヂスト教會にて 9 月 2 日より 4 日間短期講習會、野見山丹次氏。

★嘉徳エス會第三回講習會を 9 月 10 日より 2 週間夜、野見山氏指導、受講者約 25 名。

〔兵庫：豊岡〕 初等講習＝8 月 5 日より 7 日まで毎日 3 時間、南氏指導、短期講習書にて 40 名受講。この機に豊岡エス會創立。

〔敦賀〕 敦賀エス會主催初等講習＝8 月 6 日より 20 日まで、受講者 15 名中紅一點の女性あり熱心に勉強、最終日にわ半数の出席者。

商業取引に實用

★株式會社三洋商會（東京）——寫眞及び繪葉書の Albumo の製作販賣を以て有名な同商會わ今回販路を北米、支那、印度に開拓すべく決意し名古屋の同志山田弘の手に依つて同方面の外人同志 15 名に對しエス語を以て内容確實なる百貨店、文房具店の店名、住所及び取引方法の調査を依頼せし所、10 名（各都市 1 名）より満足なる回答に接し既に數通の取引申込さえあり相當の効果をあげた。

★北大黒屋商店（名古屋）——エス文入り絹ハンカチ、浮世繪版その他日々趣味豊かな特産品をエスペラントのみを用語として海外に賣出し國際語の實用性を一般世人に知らしむべく實行中であつた同商店わ過去 2 年間に 18 ヶ國より 70 回の注文にて千圓に近き豫想以上の成績をあげた。

〔長崎〕 最近各國が對外貿易の不振に喘いでゐる折からこれわまたはるばる獨逸より長崎貿易商同業組合の迫文三郎氏の許えエス語に依る取引希望といふダンセン嬉しい便り。同組合でわ最近獨逸よりエス語を以て取引希望の照會があつたので非常な興味を以て型録及値段表を發送したる由、勿論一切エスペラントに依つて説明されたるもので近く長崎と獨逸とのエス語に依る取引が始められる筈。

——【寫眞説明】——

★（上左）水原エス會 8 月 13 日第二回特別研究會。

★（上右）函館エス會 8 月 1 日初等講習修了記念。

★（左）8 月 22 日より 26 日まで島根縣隱岐島華頂女學院にて講習會が開かれた、指導者わ京都の秋山文陽氏、參會者わ高女教諭 3、小學校長 2、教員 2、支廳員 1、住職 1、郵便局員 5、高女卒業生大學生中學生徒、女學生等で計 36 名。司會わ高女教諭松岡高宮の二婦人。



會合だより

福岡

福岡エス俱樂部 9月13日奈多海岸に pikniko, 参加者18人、晝食後茶店で茶話會を開き秋の programo について熱心に協議した。歸途名島飛行場を見學し航空機とエスペラントについて我々の新しい舞臺を感じた。三萬坪の埋立も着々進行して名實共に國際飛行場として面目を新にするであらう。

長崎

長崎エス俱樂部 12日夜9月例会。長崎郵便局外國郵便課長成定源八氏の「外國地名の由來」、長崎縣土木課長楠宗道氏の「洪水の話」、長崎貿易商同業組合迫文三郎氏の「エス語に依る對獨貿易について」、次に長崎醫大の福井嬢流暢なエス語で感想談のくさり紅唇よりほさばしるその縁の言葉わ斷然講堂の聴衆を魅了して快辯あたるべからざるを思わしめた。

八幡

横須賀海軍工廠から八幡製鐵所に出張して居られた松葉菊延氏が任期满ち歸國されることになつたので8月12日同市在同志主催の送別會を催した、出席者14名の内11名わ1ヶ年間に鍛へ上げられた同氏の弟子である。

大分

8月10日20時から豊州新報社樓上で長崎醫大植田教授の歡迎會を催した。高橋會長歡迎の辭を述べ植田氏の謝辭、敦賀の大和田ひな子さんの祝電を披露し續いて麻生氏のエス語、談話同氏の通譯で植田氏の講演あり、竹崎、下河原氏をはじめ出席者の感想談あり23時散會。

横須賀

一ヶ年間九州にあつて綠化運動に盡力された松葉氏わ8月16日歸横されたので學會横須賀支部に於てわ8月22日19時より事務所に於て歡迎會を催した。平塚の清水氏を始め出席者16名、林氏の歡迎の辭に始まり次いで松葉氏の挨拶あり約一時間に亘つて八幡市滞在中の感想談及北九州に於けるエス語運動の紹介等あり23時散會。

大阪

毎週月曜日の例会わ常に盛會であり婦人同志の出席も次第に増加しつつある。會員一同の希望で會話の練習に古參者一同が初學者を熱心に指導して居り最近効果の見るべきものがある。(大阪エス會)

京都—敦賀

8月6日より20日まで敦賀で講習會が開かれたのを機として、大和田ひな子氏等の厚意でカニヤ店主中原氏等一行7名わ23日來敦、白砂青松の松原公園内東洋ホテル宿泊。25日夜喫茶ウメダ

にて敦賀、京都同志の談話會を催す。一行わ楽しい五日間をすごして歸京。

三重

神都エス會創立一週年記念會合わ8月27日19時より神都希望館に於て開催された、松坂より南氏ら見え各出席者一年間の感想を語り合ひ、茶話會となれば一層各自話に身が入り21時すぎ閉會。

函館

函館エス會 8月4日高桑氏方にて例会。★8月14日大泊え徒歩にて遠足6名参加、途中大雨の爲半日を山中の温泉宿に過し、かえつてゆかいな時を過した。

★8月22日、日本エス學會理事河崎なつ女史來函、婦人エス會主催の茶話會計畫も女史の連着の爲流會となる。

★9月1日仙臺より來函の堀田氏の歡迎會を十字街龍屋にて開く、出席者8名。

★9月6日東京より來函中の寺氏の送別會を兼ねて湯の川温泉に遠足、参加者婦人のみにて13名、甚だかまびすし。

★會話會わ毎週土曜日龍屋にて開催。

★婦人部例会わ毎週二回高桑氏宅に會合。

仙臺

8月15日夏期講習會が成功裡に終つたので帝大工學部會議室でSESの例会を兼ねて10.5時から會合を催した。堀田氏の司會にて講習生の謝辭、各部委員の報告、自己紹介、餘興などに興じ、菊澤吉田のエス語演説に耳を傾け正午を聞いて解散。出席者20名。閉會後有志6名にて宋彈寺え。そこにわ我らの先覺者萱場氏が冥してゐる恰度盂蘭盆の中の日。

★8月中わ休會してゐたザメンボフの輪讀會わ10日からまたはじまつた。

★新たに會話練習會を持つ事になり第一回會合わ13日19時より東一番町喫茶ヒロセにて。

東京

セルベント會 persisteco を誇るさすがの la serpento も暑氣にわ limako に出遇つた如く意氣、地に落ちて例会を休んでゐたが „En la Nebulo“ の出版を期して9月18日夜露木氏方に會合し、同書の朗讀を試みた。配役に適當の人員が揃わぬ爲充分の成績を見るこゝが出来なかつた。

——マツチのレッテル——

★APOTEKO ŠIMIZU; Kuraciloj kaj Tualetaĵoj. 東京府下池上町市野倉268 清水藥局

★ORA EPOKO 東京新宿二丁目 喫茶店

★京都市三條大橋東詰 京阪食堂

◎[エスペラントで書かれた看板の寫眞及マツチのレッテル等學會内報係あて御送り下さい。内地報道、或わ展覽會の材料になると思いますから。尙内地報道の原稿にわ他の信通文を書かぬ様お願い致します。——係]

東京に於ける會話會

- ★Mita Vespero 第一土曜日 19 時より三田明治製菓地階にて 慶應エス會主催。
- ★Argenta Kunsido 毎週土曜日 14 時より 18 時まで銀座明治製菓階上、但し第二土曜日 19 時より。S-inoj わ Senpage, S-roj わ一割増。11 月 14 日第百五十回記念會合を催す筈。
- ★Sodaj Amikoj 第三土曜日 19 時より新宿明葉階上 (早大エス會主催)。Venuso と場所が同じ、同志の御意見を待たし。
- ★Venuso 第四土曜日 19 時より新宿明葉階上。
- ★Hongo 毎月 1 日 15 日 19 時より本郷三丁目青木堂にて、特に自然科学方面の同好者の出席を待つ。(江上不二夫、安村和雄)

名古屋エス聯盟創立

8 月 24 日名古屋エスペラント聯盟創立總會 19 時半から大池町和敬會館に開かれ出席者 120 名餘、エスパーロ合唱の後規約を審議決定し、委員の選舉、委員及び聯盟員の感想發表あり、次に聯盟の研究會を下記の如く決定した。★日曜：婦人の會、會話會。★月曜：市民の夕。★火曜：讀書會。★水曜：研究會。★金曜：學生部。★土曜：無電局の夕。

JOBK の 成 功

既報大阪放送局よりの長期エス語講座 8 月 29 日成功裡に終了した。未だ聴取者數わ明らかでないが講師進藤靜太郎氏の許にささいな答案わ毎回七百餘通以上であり、質問希望等の通信が數百通あるを見れば、如何に大衆がエス語に関心を持つに至つたかやうかがわれる。殊にラツカによる書取の如きわ他の語學の模倣を許さぬ處で答案 80% 以上が僅か 5 以下の誤と云ふ成績、目下 OES の會員一同がその整理に大奮。

その後の La Anarkisto

- ★1929 年 11 月創刊して 30 年 9 月まで八號を出した La Anarkisto わその後繼續困難で出なかつたが今後わ巴里の Libera Laboristo をその代用とすることにした。
- ★Anarkista Ĵurnalo には毎月 Libera Federacio と云ふ欄で L. L. の詳論抄譯をやつてゐる。
- ★La Anarkisto も Libera Federacio も共に仲間以外にわ送らないし、komunikistoj のやうに騒がないし、かつ古い有名な人が技術的に光つてゐる。

— 地 方 會 —

- ★名古屋エス聯盟
名古屋市東新町 陸ビル内
- ★豊岡エスペラント會(40)
兵庫縣城崎郡豊岡郵便局 濱本玉雄
- ★朝鮮エスペラント學會
朝鮮京城黄金町 2 の 199
- ★朝鮮水原エスペラント研究會(33)
朝鮮水原邑山樓里 173
- ★隠岐エスペラント會(36)
島根縣周吉郡西郷町華頂女學院
- ★京城醫專エスペラント會
朝鮮京城府京城醫學專問學校
- ★函館エス婦人會(18)
函館市高砂町 12 幸田方

— 地方會機關紙 —

- ★Nia Voĉo 8 號、9 號 仙臺エス會
- ★Amikeco 1 號—3 號 大津エス聯盟
- ★Verda Kioto 4 號 ヴエルダキヨト社
- ★FER 7 號 東京鐵道エス會

新聞雜誌とエス語

婦人と生活

8 月創刊静岡縣清水市生活
合理化研究會發行。エスベ
ラント講座が毎月連載される。

- ★同志社高商學友會雜誌 11 —— 綠星の使命
と題してエス語を概括して紹介してゐる。
- ★豊州新報 8・5・6 歐洲各地の國際語運動
—— 麻生氏が蘭から來た手紙を披瀝
- ★九州公論 6・28, 7・5, 7・15 —— エスペラント
と如何なるものか —— 長崎高商徳安氏
- ★秋田魁新報 8・7 —— 本誌八月號の紹介
- ★人吉新報 7・4, 7, 16, 19 —— 吾人わ何故に
エスペラントを研究宣傳するか —— 土肥氏
- ★人吉新報 7・4 —— 八つあたり。7・13 —— 從
橫無盡 —— 求波氏〔表題通り —— おそらく
編者の見る處でわエス語を習つても思ふ様
に進歩せぬのに業を煮やして從橫無盡に八
つあたりをしてゐるらしい —— 秀逸な暴
論〕
- ★山陽新報 7・31 —— エスペラント文學の發
生 —— 伊藤三郎氏
- ★名古屋新聞 6・8・25 —— エス聯盟創立總會
- ★大分日々 6・8・12 —— 大分エス會會合の記事
- ★大分日々 6・8・26 —— 大分エス語會々場變更
- ★大阪ロータリアン第 397 號 —— 五ヶ年以内に
エス語の實現を期せ —— 松山氏
- ★新國民 9 月號 —— 國際語に就て —— 日野氏

X-a Internacia Tendaro

7月14—20日 ブダペストにて義勇團
エスペ란チスト聯盟の會合

- ★總大將ノルマン・アース氏わ 18 名の團員を引率して此の會の成功を確實ならしめた。
- ★フンガリア義勇團 フンガリアエス協會、カトリックエス協會、UEA 等の名に於て演説、17ヶ國代表の挨拶、此の中にわアルヂエンチン義勇團もまじつてゐた。日本からわ?
- ★フンガリア義勇團主催の遠足會にわ5ヶ國 70餘名が參加した。各地 esp-istoj が此の露營地を訪れた。
- ★此の會合に於てクラコウに於ける萬國エス大會にエスペラント及び Skoltismo を各國に速進せしむべき提議を送つた。
- ★野營のテントにわ緑の星がついてゐた。

會員の聲

- ★宣傳の一方法として考へましたが本年わ個人よりも寧ろ全國の中、女學校乃至專門學校に働きかける時代かと存じます。就きましてわ學會々員にして、各學校圖書館にエス書を寄附せんとするものにわ、御會へ注文直送の場合に限り定價の一乃至二割引とする事にして Libro-feto を期して全會員に寄附をすゝめられてわ如何ですか。(長野縣土井英一)
- ★學會より 本年わ計畫してみたいと思つて居りました。皆様の御聲援を願います。

KORESPONDA FAKO

U . S . A

- ★S-ro. k. S-ino. W. Jackson;—
S-ino Mary Houseman;—III. Garfield St. Seattle Wash.
- ★S-ro. W. G. Adams; detektivo;—Apartment C. 214 University St. Seattle Wash.
- ★F-ino Majorio Proktor;—Radiostation K. J. R. 1520 Westlake Ave. Seattle Wash.
- ★F-ino Geneviro Dunlop;—1723 Smith Tower Seattle Wash. [此の二人わ非常に仲のよい友達で2歳の美人、交通にわ必ず二人に手紙を出されたい。やきもちをやくさいけない故]。
- ★Anglujo;—Dr. S. J. Woolnough, 57 Macquarie St, Parramatta, New South Wales. dez. kor. kun kuracistoj kaj kolektantoj de insektoj aŭ P. M.

エスペラントを友邦の佛教徒へ

今日まで最も中立國際語を要求して居ながらそれが殖民地であつたが爲にエスペラント運動が發展しなかつた。印度緬甸安南布哇及暹羅に彼地の佛教團體をたよつてエスペラントを普及させ度と思ひます。方法は各統治國發行のエスペラントの鍵をサルートにそへて寄贈するのです。同志の援助を期待す。一口拾錢以上。申込所

東京牛込日本エスペラント學會
京都市六條 高倉會館内日本佛教エス聯盟

エス界 展望臺

- ★9月6日社會無産青年がエス語研究會のピクニックの名で浮間原にデモ。こわいおちさん達に捕まつた。緑の星が赤く見えなためしわあるが血に交つたら赤くなるにきまつてる。
- ★本誌 248 p. 「長崎諫早……カフエの女給さんを口説き落して……」わ悪い意味に解してわいけないんだそうだ。
- ★本誌 248 p. 特製のつばめが夜出發した。
- ★各地方に雨後の筍の如くエス會が設立される。願くは緑なす青竹にまで成長せよ。
- ★ある S-anino が媒酌結婚で ge-igi した相手わやつぱり S-ano だつた。
- ★「初等エスペラント」の最年少の愛讀者宋在東君わ當年三歳、「父ちやん此のエスペラントわうまくないよ」と云つたかごうか。
- ★喫茶店エスペラント 東京小川町の一角にエスペラントと云う名の喫茶店が ekaperi した事に就てわ本誌六月號に書かれたが此處わ名前だけの Esperanto でわ無くて此處の花岡あきさんわ數々月前から全然獨習で學び始めたのだそうだが今でわもう Fabeloj de Andersen の II を讀んで居るさの事。

Japanujo

- ★S-ro Tosio Yasato;—181 Nakazato Takinogaŭa Tokio. dez. kore. L. Pl.
- ★S-ro. T. Kinoŝita; 6685 Kugenuma-Kaigan, Fuzisaŭa, Kanagaŭa-ken. dez. kore. pri ĝardenkulturo, inter. specimenojn de vegetaĵoj.
- ★S-ro. T. Matuoka;—Katada Ise Mieken, dez. kore. kun fremdaj ge-anoj.
- ★S-ro. K. Tuyuki;—1281 Ikebukuro, Tokio dez. ricevi artaĵojn terkulturistajn kaj fotojn de nudvirinoj por la modelo.
- ★S-ro. S. Hasimoto;—Nagoya Radiostacio, Sakae-mati 3, Nagoya. dez. kore. kun radio-telegrafistoj.
- ★S-ro. N. Hasida }
S-ro. S. Kaŭano } Akaoka-mati, Kooti-ken, dez. kore. kun fremdaj ge-s-anoj.
- ★Germanujo:—S-ro Richard Zscherper. Meissen (Sa) Reichsplatz 4. dez. kore. kun japanoj.

LA MANĜOĈAMBRO

Mi nun estas en **manĝoĉambro**, kie **vespermanĝos** kvin personoj, nome: la patro, la **patrino**, la onklo, la **onklino**, kaj mi. La patro kaj la patrino estas miaj **gepatroj**; la onklo kaj la onklino estas miaj **geparen-
canoj**. Du gastoj sidas ĉe la sama flanko de la **manĝotablo**, kaj miaj **familianoj** sidas **aliflanke** po unu persono.

La tablo, kiu estas **preta** por la manĝo, estas kovrita per blanka **tuko**. Sur la tablo kuŝas **tranĉiloj**, forkoj, **kuleroj**, **buŝtukoj**, teleroj da **frandaĵo** kaj pecoj da pano. Kaj plue ni povas trovi **kondimentujon**, kiu enhavas botelojn da oleo, vinagro kaj saŭco, ankaŭ **mustardujon**.

La **servistino** eniras malfermante la pordon kaj proponis pladon da supo al mia patrino. Jen **komen-
ciĝas** vespermanĝo. En **manĝado** ni agrable **inter-
parolas** diversajn interesajn rakontojn. Tra la fenestro, ĉe kiu pendas **ĉielkolora** **silkokurteno**, enblovas **malvarma** aŭtuna **venteto**. La ĉambro **lumiĝas** per elektra lampoj.

私は今茶の間(食堂)(manĝoĉambro)に居ます。其處には(kie)五人の人等が**晚餐**をしようとしてみます(vesper'manĝos)。〔五人の人等と云ふのは〕即ち、父と母と叔父と叔母と、それに(kaj)私です。父と母とは私の**両親**(ge'patroj)であり、叔父と叔母とは私等の**親類**(ge'paren'c'anoj)です。二人の客〔叔父と叔母〕は**お膳**(manĝo'tablo)の同じ側に坐り、私等の**家族**(famili'an'oj)は一人づつ(po)他の側に(aliflanke)坐つてゐます。

食事するばかりになつてゐる(食事の爲に準備の整つてゐる)お膳は白布で(per)覆はれてゐます。お膳の上には、ナイフ、フォーク、匙、ナフキン(buŝ'tuko)、お皿に盛られた御馳走(teleroj da frandaĵo)、一切れ一切れになつたパン(pecoj da pano)があります(横つてゐます)。猶その上(kaj plue)私等は罎につまつた油と酢とソース、それに芥子入れ(mustard'ujo)までも(ankaŭ)は入つてゐる(enhavas)薬味立て(kondiment'ujo)が目につ

「茶の間」

persono 人; 人物
nome 即ち
parenco 親族
gasto 客
flanko 側
familio 家族
preta 準備完成せ
る
tuko 布
kulero 匙
telero 皿
frand'aĵo 美味
peco 片, 切
kondimento 藥味
botelo 罎
oleo 油
vinagro 酢
mustardo 芥子
proponi 申出る, 提
供する
plado 大皿
agrable 氣持良く
pendi 懸つてゐる
silko 絹
elektro 電氣

きます(を見出す事が出来ます)。

女中(servistino)が戸を開けて這入り、大皿に一パイのスープを母に差出しました。さあ(jen)晚餐が始ります(komenc'ig'as)。食事中(en manĝ'ado)私等は色々な面白い話を愉快に語り合ひます(inter'parolas)。空色の(ĉiel'kolora)絹カーテン(silko'kurteno)が〔其れに(ĉe)〕懸つてゐる窓を通して(tra)涼しい秋のそよ風(vent'eto)が吹きこんで來ます(enblovas)。室は電燈で明々としてゐます(lumiĝas)。

【註】 persono: homo が人を動物の一種と見た時の「人間」であるに對し persono は人格の主體と見た時の「人」。從て「個人」「人物」等と云ふ意が出る。

nome: nomo は「名」であるが副詞になるを「即ち」「兎に角」等となる。本文の場合は「一人一人の名を云へば」と云ふ様な氣分。

ĉe: 此語は或る物にくつついて、又は寄りそつて在る時用ふ。(以下 319(10)頁へ續く)

EL FABLOJ DE EZOPO

(初等譯註 イソップ 寓話)

小坂 狷 二

MUSOJ EN KONFERENCO

Iam la musoj multe ĉagreniĝis pro la persekutado de la kato, kaj ili okazigis konferencon por diskuti pri la plej bona metodo forigi tiun ĉi daŭran ĉagreniĝon. Ili diskutis longe; multaj projektoj estis prezentitaj kaj ĉiuj forĵetitaj kiel netaŭgaj. Fine juna muso stariĝis kaj proponis, ke oni alligu sonorileton ĉe la kolo de la kato. „Ĉar“ diris la juna muso, „kiam en la estonteco alvenos la kato, ni aŭdos la sonorileton kaj ni povos tuj forkuri.“ Tiu ĉi propono estis akceptita unuanime kaj kun varma aplaŭdo. Ĉe tio unu maljuna kato, kiu sidadis tute silenta la tutan tempon, stariĝis kaj diris, ke tio certe estas elpenso tre lerta kaj sendube sukcesa. „Sed mi havas unu mallongan demandon,“ li aldonis, „nome, kiu el vi iros al la kato kaj metos ĉe ĝia kolo la sonorileton?“

Proponi estas tute alia afero, ol plenumi.

鼠の會議

ある時鼠たちは猫の迫害 (persekut'ado) のためたいそう困りました (ĉagren'iĝis), して鼠たちは此の打ちつゞく (daŭran) 厄介物 (ĉagren'aĵon) を除く (for'igi) 最良の策 (metodo) に就て議論するため會議を開きました (okaz'igis)。鼠達は永い事 (longe) 議論しました; 案が (projektoj) 澤山提出され (e tiis prezent'itaj) そして皆 (ĉiuj) 駄目だとして (kiel ne'taŭgaj) 否決されました (for'ĵet'itaj)。終に若い鼠が立ち上つて (ek'staris) 提案しました (proponis), それは猫の頸に鈴を (sonor'il'eton) を結びつける (al'ligu) と云ふのです (ke oni...)。『さ云ふのは』と若い鼠は申しました『將來 (en la est'ont'eco) 猫がやつてくれば (kiam al'ven'os) 吾々はその鈴の音を聞き (aŭdos la sonor'il'eton) すぐ様逃げるこそが (for'kuri) 出来るからです』此の提案は満場一致で (unu'anim'e) 熱烈な喝采を以て採擇されました (estis akcept'ita)。此を見て (ĉe tio) 一匹の鼠が、その鼠は (kiu) すつと (la tutan tempon) 全く黙つて坐つてゐた (sid'ad'is silenta) のでしたが、立ち上つて (star'iĝ'is) 是はたしかにたいそううまい (巧な lerta), しかも疑なく (sen'dube) はづれつこのない (成功する sukcesa) 考案 (el'penso) であると申しました。『然しわしは一つ短い質問がありますぢや』と彼は言葉をつゞけて申しました (云ひ添へた al'donis) 『即ち (nome) 諸君の中で誰が (kiu el vi) 猫の處へ行つてその頸に鈴をつけますのかな』。

提案すると云ふことは實施する (plen'umi) と云ふことは全く別な (alia...ol) 事なのです。

ĉagreni (人を) 困らす, 閉口さす, 無念がらす

ĝeni (人を) 迷惑さす, 邪覽をする

turmenti (人を) 苦しめる, いぢめる

esti ĉagrenita = ĉagren'iĝi 閉口する, 参る, 無念がる。

rato (日本の家に住む) ゴブ鼠, 野鼠

muso (西洋の家に住む) 二十日鼠

okazi (或事が) 起る, (會などが) 催される

okaz'igi (會など) 催す

konferenco (相談外交の) 相談會, 商議會

kongreso (同目的者の親睦意見發表などの) 大會

kun'ven'o, kun'sido 會合

diskuti 論議する, 討論する

disputi 口論する, 云ひ争ふ

for'iri (あちらへ) 去つて行く

for'ĵeti (あちらへ) 投げ棄てる

for'kuri 走り去る, 逃げてゆく

for'igi 除去する, さりのける

{daŭr'i 繼續する, daŭr'a 繼續的な
 {taŭg'i 適當である, taŭg'a 適當な
 {projekto 計畫, 案
 {propono (こうしたらどうですか) 申出(る
 {こと), 提案
 {prezenti (人の前へ) 提出する。
 {ligi 結ぶ, al'ligi 結びつける。
 {sonori 鐘の音をたてる
 {sonor'ilo 鐘; sonor'il'eto 小い鐘, 鈴
 {est'ant'eco (今現にあること) 現在
 {est'ont'eco (これから在らんとする) 未來
 {est'int'eco (既に在つた) 過去
 {akcepti (提案などを) 採る, (贈物などを)

受納する, 訪客を引見する。
 animo 靈; unu'anim'e (靈を合せて一つに
 なつて) 満場一致で, 異議なく。
 {unu horon 一時間(の間)
 {(unu) tutan horon 丸一時間ちう
 {tutan tempon (全體の) 時間ちう, すつさ
 {(その間ちう)
 {el'pensi 考へ出す, 案出す, 發明する。
 {nom'o 名; nom'i 名づける, 名指す; nom'e
 (之を更に名指して擧ぐれば) 即ち
 {unu el vi 君等の中の一人が
 {iu el vi 君等の中で誰かが
 {kiu el vi? 君等の中で誰が…か

VULPO KAJ MASKO

Vulpo enŝteliĝis en la domon de aktoro, kaj, traserĉante liajn diversajn posedaĵojn, ĝi trovis tre bone elfaritan maskon. „Bele aspektanta kapo, efektive!“ kriis la vulpo, „sed kia domaĝo estas, ke al ĝi mankas cerbo!“

Bela eksteraĵo estas nur mizera anstataŭanto por interna valoro.

{ŝteli こつそり) 盗む
 {en'ŝtel'igi こつそり入り込む
 {el'ŝtel'igi こつそり出る
 {serĉi 捜す, tra'serĉi のこらず捜し廻る。
 {fari 爲す, 作る, 造る; el'fari 作り出す, こ
 {しらへ上げる, 完成する。
 {vizaĝo (身體の一部たる) 顔
 {mieno (顔面に表現される喜怒憂樂の顔の
 {見榮) 顔付
 {aspekto 外見(顔でも, 又は顔でなくとも),
 {様子, なりぶり
 {aspekti 外見…である, …な様子である。
 {domaĝo 氣の毒, かわいそうな事。
 {manki al… …に(何々)がない, 足りぬ。
 {ekster… [前置詞] …の外に; ekstera 外部
 {の; ekster'aĵo 外部, 外觀
 {interna 内部の; internò 内部; interne de…
 {…の内部に
 {anstataŭ… [前置詞] …の代りに; ansta-
 {taŭ'i 代る, 代理する。
 {mizera あはれな, みじめな, けちな, つま
 {らぬ (お話にならぬ物など)。

狐とお面

狐が役者 (aktoro) の家 (の中) へ (en la domon) しつこく込みました (en'ŝtel'ig'is), そして彼の色々な所有物を (posed'aĵojn) かきまわして (tra'serĉ'ant'e) たいそう美事に作り上げられた (el'far'ita) お面を見出しました。『美しい顔付きの (bele aspekt'anta) 頭だなあ, ほんとに!』と狐は叫びました, 『だが何て氣の毒なこつた (kia domaĝo estas) 腦がない (それに腦が缺けてゐる (mankas) さは (ke)!』。

美しい外觀は (ekster'aĵo) 内部の價值に對してはさても代理にならぬ (あはれな代理者 anstataŭ'ant'o である)。

(317 (8) 頁『茶の間』より續く)

比較 Mi estas ĉe la tablo.

私はテーブルの處に居る。

Mi estas al la tablo.

私はテーブル(食卓)に就いてゐる。

vinagro: 音から察するに vino akra (強い酒) から由來してゐるものゝ様だ。此れも亦單語記憶の一法である。

plado: 大皿であるが telero よりも大きさが大さ云ふだけではない。telero は其の中から食物を取出して食べる爲の皿, plado は食卓に運んで來て其の中から各 telero に食物を取分けるに用ひる皿の事である。本文で太文字になつてゐるのは皆合成語です。初學のエスペランティストには simpla vorto (素語) さへ憶えてゐれば合成語なんか何時でも解かると云ふつもりで合成語の記憶を疎かにする傾向がありますがこれは非常に間違つた考へです。合成語も一つの素語と看做して同等の注意と努力とを以て記憶する様にせれば實用になりません。そう云ふ意味で特に注意の爲太文字にしたのです。 (小野田幸雄)

ザメンホフ讀本 (全三卷)

城戸崎益敏編 ザメンホフ全集の縮圖

★各巻 50頁 定價20錢(送料2錢) ★ 合本 150頁 定價50錢(送料4錢)

~~~~~ 合本にはザメンホフ寫眞を挿入す ~~~~~

## ★ 第一卷 (ザメンホフの翻譯物より) 各課の終りに解題、讀解上の註を附す。

(1) アンデルセン童話(1. 王様の新しい御衣 2. 醜い家鴨)。 (2) エスペラント諺集抄(60句)。 (3) 檢察官(最後の二幕)。 (4) 聖書抄(1. 天地の創造 2. 詩篇第23篇 3. 傳道之書より)。 (5) ハムレット(4つの有名なるハムレットの獨白)。 (6) マルタ(1. 最初の不幸 2. 屋根裏のマルタ 3. 最後)

## ★★ 第二卷 (ザメンホフの原作物より) 各課の終りに解題を附す。

(7) エスペラントの由來。 (8) エスペラント主義に關する宣言。 (9) 人類主義について。 (10) 將來の國際語。 (11) 大會の演説(5ツ)。 (12) リングヴィ・レスポンドイ抄(6ツ)。 (13) 書簡抄(6ツ)。 (14) 原作詩抄(2ツ)

## ★★★ 第三卷 (ザメンホフに關する著作より) 各課の終りに解題を附す。

(15) ザメンホフ傳(レオノ・ザメンホフ)。 (16) 第一書の出現(ブリヴァ)。 (17) 第一回萬國大會(ブリヴァ)。 (18) ザメンホフ會見記(デグヤトニン)。 (19) ザメンホフの最後(ブリヴァ)。 (20) 吊辭(ガラホウスキー)。 (21) 國際語運動に於けるザメンホフの役割(ドレーゼン)。 (22) ザメンホフの詩について(ブリヴァ)。 (23) エスペラント主義の內的思想(ドレーゼン)。 (24) [邦文] ザメンホフ故地巡禮(土岐善鸞)。

附錄 I. ザメンホフ年表(ザメンホフ在世中のエスペラント運動の歴史と共に)  
II. エスペラント研究圖書目錄

## EN LA NEBULO

山本有三原作  
ラジオ・ドラマ  
露木清彦譯

菊半截 32頁 上質コットン紙 印刷鮮明

定價15錢・送料2錢 著者裝幀 體裁優美

**I** 1927年7月東京JOAKより放送されて大好評を博したラジオ・ドラマのエス譯。卷末に術語註解が一頁添えてある。

譯文流麗——講習會に好適

元來ラジオ・ドラマなるものわ讀むべきでなく見るべきものでもない。ラジオの發達に伴つて聽くべきドラマとして創り出されたものであるが、又讀んでもその眞價を決して失うものでわない。依つて本書を世に送る次第である。

東京市牛込區 財團 日本エスペラント學會 電話牛込(34) 5415番  
新小川町3の15 法人 振替口座東京11325番



到 着 !!

LA VOJO RETURNE

ルマルク原著『西部戦線異常なし』の姉妹篇  
上製 4,25 (21) 普製 3,00 (21)

## 新 着 及 再 着 洋 書

|                                                 | 定 價     | 送 料 |
|-------------------------------------------------|---------|-----|
| Milano kaj Lagoj de Lombardio. ....             | 上製 2.30 | (4) |
| ベアカ案内書にも匹敵する伊太利 Milano 市と附近沼湖の案内記、多数地圖入         |         |     |
| Analiza Historio de Esperanto-Movado. ....      | 0.85    | (4) |
| Drezen の近著、エスペラント運動史大観、最近邦譯も出來た                 |         |     |
| Teorio de Esperanto. ....                       | 1.25    | (4) |
| Varankin 著、主として膠着語系より見たるエス語の解剖理論的檢究             |         |     |
| Skizoj de Teorio de Esperanto. ....             | 0.55    | (4) |
| Drezen 著、エス語の言語理論的檢討、露エス對照                      |         |     |
| Progresado de Pilgrimanto. バンヤンの名著「天路歷程」.....   | 0.90    | (4) |
| フランス Ŝlosilo. ....                              | 0.06    | (2) |
| Protokolo de X Kongreso de SAT. 活氣に満ちた .....    | 0.40    | (2) |
| Preparanto de Milito. 反動産業黨に對する告訴狀の公開 .....     | 0.35    | (2) |
| ABC de Sennaciismo. SAT とは何ぞや、その入門解説 .....      | 0.30    | (2) |
| Por la Neŭtralismon. 中心主義を棄てる、Lanti の叫び .....   | 0.18    | (2) |
| Laborista Esperantismo. 労働者の同志が進むべき道 .....      | 0.20    | (2) |
| Etiko. クロボトキン著の『倫理學』、新しい人道史觀 .....              | 1.00    | (6) |
| Kristanismo k. Patriotismo. トルストイの基督教愛國心觀 ..... | 0.60    | (4) |
| Hodinka. トルストイの短篇數篇 .....                       | 0.30    | (2) |
| Kandid. Voltaire の傑作、Lanti 譯、快樂觀の小説 .....       | 0.95    | (4) |

萬國エス大會出席と各國エス同志訪問が唯一の目的で  
歐洲を跨にかけた快男兒 林好美君の愉快極る旅行記

## 歐羅巴親類巡り (日本文)

林好美氏著 長崎醫大教授 淺田博士序 定價 {上 95 錢  
並 85 錢} 稅 8 錢

世界中を歩き廻るのにエスペラント語だけでは不自由ではないか？  
淋しくはないか？心細くはないか？本書はそれに對して何と答へて  
ゐるか。行文輕妙、とても愉快だ。本書を読んだら誰でもエスペラ  
ントを學び、外國へ旅行したくてたまらなくなるだろう。百聞は一  
見に如ず、普及には持つて來いの快著、快、快、快、…… 此の字を  
いくつ並べても足りない。

東京市牛込區  
新小川町3の15

財團日本エスペラント學會  
法人

電話牛込 (34) 5415番  
振替口座東京11325番



# —1932年度外國雜誌取次—

締切—11月15日（期限後は絶対に取扱ひません）

**HEROLDO DE ESPERANTO** .....年6圓

週刊新聞（年52號）、菊四倍版8頁、多數寫真版入記事豐富報道敏速。

**LITERATURA MONDO** .....年3圓80錢

Baghy, Kolocsay 等エス文學界の諸明星執筆編輯、文藝美術專門雜誌、四六四倍版28頁。極上等紙印刷鮮明、多數美術寫真入。

**ESPERANTO** .....會費（年鑑付）共5圓；雜誌のみ4圓

萬國エスベラント協會機關、月刊、菊倍版約20頁、論說社會文藝等。

**SENNACIULO** .....年5圓

SAT 幹部派機關、週刊、菊倍版12頁、無產運動、社會問題。

**NOVA EPOKO** .....2圓50錢

SAT 發行、月刊、文學及科學の特別雜誌。社會教育的好讀物。

**INTERNACIISTO** .....1圓70錢

STA の Opozicio 機關、菊倍版月2回、階級闘争、社會問題等。

**INTERNACIA SCIENCA ASOCIO ESPERANTISTA**

本年より取次を中止します。

~~~~~  
【注意】（1）住所氏名はロオマ字又は振假名付、明瞭に記し一年分購讀料を添え當會宛申込まれたし。（2）雜誌は先方より直送。（3）休刊、住所變更等による不着等は一切當會其責に任ぜず。（4）本年度より引續き購讀せられる方は reabono（再購讀）の旨附記せられたし。（5）轉居の節はなるべく直接に發行所へ御通知願ひたし。

東京市牛込區 財團 日本エスペラント學會 振替口座東京11325番
新小川町3の15 法人 電話牛込(34) 4515番

下記諸氏現住所御承知の方はお知らせ乞ふ。

岩本左武郎氏 元シヤム國バンコック市
小森正銳氏 元函館市千代ヶ岱17
森信英一氏 元廣島市南竹屋町605
藤井三郎氏 元戸畑市明治専門官舎
齋藤力氏 元東京麻布區山元町36
羽津兼澄氏 元九大醫學部第三内科
赤司和嘉氏 元秋田市土手長町原病院

加藤菊苗氏 元名古屋市西區木挽町
中田熊雄氏 元東京府澁谷町代官山5
湯谷壽昌氏
松田喜久馬氏 元工兵第十四大隊の三
松岡繁氏 元神戸市下園町382
青森縣エス聯盟 元青森市博勞町長谷川方

東京市外目白文化村57 西成甫方

東宮豐達君遺兒教育後援會

カマデー

労働者農民の語学研究雑誌 **読め!**
 たれにもおぼえられるエスペラント

★ ★ ★ ★

プロ・エス自警……………秋田 雨 雀
 トラクターの話 (1)……………園 部 四 郎

外国からの手紙

自然科学の常識

俺たちの字引

新刊紹介

日本エスペラント大会に
 對する態度

國際プロ・エス運動

ポエウの旗は進む

PEKのページ

10月創刊號

20セ ン (送料二錢)

★プロレタリア療養所

★農學校の女學生から

★ベルリンのメーデー

工場農村から

どんな時でもがんばるゾ
 ベルリンのプロエス運動

音讀しつゝ

國際意識を

カ マ ラ ー ド

エスペラント文學の創造

プロ・エス感想二三

編輯局へ

Asaka filio nia

座 講

★プロ・エス中等講座……………高 木 弘
 ★初 等 講 座……………河 野 直 弘
 ★プロレタリア國際語……………高 木 弘

德永直・豐年飢饉(エス譯)……………中垣虎兒郎

東京市神田區一ツ橋通九

鐵 塔 書 院

振替東京13789

東京市神田北神保町11

日本プロレタリアエスペ란ティスト同盟

振替東京66230

發行所

財団法人 日本エスペラント學會發行圖書其他

		價目	送料
エスペラント捷徑	最新最良の獨習書……………	{ 上製 1.00 並製 0.50	4
エスペラント講座	外國語を知らぬ人の獨習講義録……………	0.50	4
新撰エス和辭典	語數一萬五千餘、譯……………	{ 並製 0.60 上製 0.80	2
エスペラント講習用書	語正確、索出至便……………	0.30	2
エスペラント短期講習書	文法教科書と讀本とをかね……………	0.20	2
エスペラント初等讀本	大きな活字で要領よく編輯した……………	0.30	2
エスペラント中等讀本	挿繪入程度低く小中學生にも適す……………	0.30	2
エスペラント發音研究	興味深き讀み物數十篇を収む……………	0.30	4
點字エスペラント文法と小辭典	エス語發音上の疑問を氷解す……………	1.00	6
エスペラントやさしい讀み物	盲人用獨習書兼字引……………	0.10	2
愛の人ザメンホフ	笑話廿二篇を對譯詳註し興味横溢……………	0.80	6
リングヴィ・レスポンドイ	エス語創案者ザ博士の傳記……………	0.50	4
エスペラントの鍵	ザ博士の言語上の解答を蒐む……………	0.05	2
歐羅巴親類巡り	文法及三千五百語を含む小辭典宣傳用……………	{ 上製 0.95 並製 0.85	8

~~~~~ エスペラント對譯詳註叢書 ~~~~~

1. マテオ・フアルコネ 「カルメン」の作者メリメエの名篇……………0.35 2
2. ハイネ詩集 情熱詩人ハイネの詩數十篇……………0.40 2
3. 魔法使 ザイデルの爐邊物語中の一篇……………0.40 2
4. 代理通譯 一幕物抱腹絶倒さす程の大滑稽劇……………0.40 2
5. 愛ある處神あり 杜翁の短篇。附録「エス學習書籍解題」1.50 6
6. レイモント短篇集 「農民」で有名な波蘭文豪レ氏の短篇……………0.40 2

~~~~~ エスペラント書き日本叢書 ~~~~~

Literatura Serio A

1. 骸骨の舞跳……………0.40 2
2. 倫敦塔……………0.15 2
3. 霧の中……………0.15 2

Literatura Serio B

1. 惜みなく愛を奪う……………0.75 4
2. ベルダ・カルト……………近 刊

Scienca Serio

1. 日本民族の起原……………0.10 2

| | | | |
|-------------|--|------|------------|
| エスペラント單語カード | 七百二十語に一々用例を示す…………… | 1.70 | 12 |
| エスペラント文例集 | カードと同一内容の本…………… | 1.00 | 6 |
| エス演說會話レコード | 小坂氏吹込兩面…………… | 1.20 | 40 (内地外70) |
| エスペラント便箋 | 正百枚一冊…………… | 0.20 | 4 |
| エスペラント封緘紙 | 八十枚入一袋…………… | 0.20 | 2 |
| エスペラント手拭 | 三越特製上等…………… | 0.20 | 2 |
| 日本風景風俗エハガキ | 四枚一組三色刷エス説明入…………… | 0.10 | 2 |
| 緑星章 | { 甲種(安全ピン止) 乙種(背廣用) 各 (送料共)……………
丙種(安全ピン止特製) 丁種(背廣用特製) 各…………… | 0.30 | - |
| 緑星カフスボタン | (箱入一組)…………… | 1.20 | 6 |
| 緑星ネクタイピン | …………… | 送料共 | 0.30 |
| 緑星旗 | 紙製緑地に白く「エスペラント」と抜く。十枚(郵税共)…………… | 0.15 | - |

東京市牛込區
新小川町3の15

財団法人 日本エスペラント學會

振替口座番號
東京 11325 番

La Revuo Orienta—Monata Organo de Japana Esperanto-Instituto,
Ŝin'ogaŭamaĉi III-15, Uŝigome, TOKIO, Japanujo; abono internacia 7 svis. frankoj.

我國に於けるエスペラント普及・研究・實用の中心機關

財團 日本エスペラント學會

東京市牛込區新小川町三の十五

—【電話牛込(34) 5415番—振替口座東京11325番】—

目 的 エスペラントの普及、研究、實用

事業 { (a) エスペラントに關する各種の研究調査及其發表
(b) 雜誌及圖書の刊行等
(c) 講演會、講習會の開催及後援
(d) 其他本會の目的を達成するに必要と認むる事業

尙ほ本會に關する詳細及び本會發刊書並に内外エスペラント圖書目錄は郵券二錢封入御申込み下さい

驚くべき廉價なる初等學習及宣傳用雜誌

初等エスペラント

本誌 La Revuo Orienta の初等向の頁を抜き、卷頭言等を附したもの

毎月五日發行 表紙共每號十六頁

誤らざる學習の指針——懇切なる獨學の伴侶

購讀料 僅かに一年分六十錢 半年分三十錢

本誌の弟分たる『初等エスペラント』を愛護して、宣傳しませう

(見本は郵券五錢封入御申込み下さい)

本誌購讀料 (郵税別)

| | | |
|----------|--------|--|
| 一 部 | 圓 0.20 | 圖書目錄及本會の詳細に關しては二錢切手封入申込まれたし。 |
| 半年分 | 圓 1.20 | |
| 一年分 | 圓 2.40 | |
| 本會振替口座番號 | | { 一般 (東京 11325 番)
會計用 (長野 3283 番)
基本金專用 (東京 32089 番) |

昭和六年九月二十五日印刷
昭和六年十月一日發行

編輯兼
發行人

東京市牛込區新小川町三ノ一五
大 井 學

印刷人

東京市神田區三崎町三ノ一四六
高 見 澤 保 芳
(一 國 印 刷 所)

發行所

東京市牛込區新小川町三ノ一五
財團 日本エスペラント學會

昭和六年十月一日發行 (毎月一回一日發行)
エスペラント研究雜誌ラレゾオ・オリエンタ第十二年第十號

定價貳拾錢 (送料貳錢)